採蓮
Siren

第十二号

No.12

目次
Contents

採蓮のいわれ　4
The Implication of "Siren"　5

図版　7
Plates

鳥居清長作品総目録、補遺　浅野秀剛　9
Catalogue Raisonné of the Works of Torii Kiyonaga, An Addendum　Shūgo Asano　60

高松次郎の「塾」――一九七一年度の活動――　藁科英也　61
Takamatsu Jirō's "juku" in 1971　Hideya Warashina　79

平成二〇年度　千葉市美術館の活動　81
Fiscal Heisei 20 Activities of Chiba City Museum of Art

採蓮のいわれ

蓮は古来の画題でありそれを描いた名画が多い。その花は清浄無垢、また枯れては寂寥の情をもたらす。千葉は古代蓮の種が発掘され現代に命を復活した町であり、奇しくも千葉市美術館は古には蓮池（はすいけ）と呼ばれ蓮の漂う池を埋立てたといういわれの繁華街に位置する。音通するsirenは美声をして船乗りを誘惑し難破させるギリシャ神話の海の精である。蓮を採るが如く古今の美を紡ぎ、妖精の如く人を魅惑する芸術に就いて論ずべく本誌の題を定めた。

千葉市美術館

The Implication of “Siren”

The lotus has been the theme of painting, and there many master works which delineate it. Its flower is pure and innocent, and gives the feeling of loneliness and silence after it is withered. Chiba is where ancient lotus was discovered and its life was reinstated. Coincidentally, the Chiba City Museum of Art is located on a street made by reclaiming the lotus field called Lotus Pond(Hasu-ike) in ancient times. *Siren* has same phonetic expression as Siren in Greek mythology who lured mariners to their destruction. The name of the bulletin was decided with the intention to weave the beauties of both present and ancient times as if harvesting the lotus and to discuss the arts which lure us like a siren.

Chiba City Museum of Art

肉筆34　（浅野報告の参考図参照）

563　（同上）

鳥居清長作品総目録、補遺

浅野秀剛

千葉市美術館は二〇〇七年四月二八日から六月一〇日まで「鳥居清長」展を開催し、それに合わせて図録を刊行、更に、同年五月三一日に『鳥居清長作品総目録』を刊行した。この研究紀要には、『鳥居清長作品総目録』に載せなかった辻番付を掲載したが、他に、その後に判明した補遺と、若干の覚書を記したい。

1　鳥居清長辻番付目録

1　この目録には、清長が関与したと推定される江戸の大芝居の辻番付を収録した。一部、辻番付を再利用した役割番付も収録したが、それについてはたまたま気づいたものだけであり、網羅的に調査はしていない。

2　辻番付には絵師の署名がないため、清長が版下を描いたかどうかの判断は容易ではない。鳥居家三代目当主の清満が天明5年4月3日に没して後、清長が鳥居家を統率するようになるのが何時からかは判然としないが、天明5年11月の顔見世番付が「鳥居清長筆」となっていることを考慮し、この目録には天明5年以降の江戸の辻番付をすべて収録した。ただし、清長が全く関与していないと思われるごく一部のものは省いた。

3　辻番付の図の版下は鳥居家の仕事であったため、清長が当主である期間は清長が絵組みを統率したと推定されるが、実際の版下をすべてを清長が描いたかどうかは定かではない。したがって、天明4年以前のものにも清長の版下と思われるものがあるが、それは収録していない。

4　清長は文化12年5月21日に没しているので、同年5月初日のものまで収録した。

5　配列は、①中村座・都座、②市村座・桐座、③森田座・河原崎座の順とした。

6　辻番付には、原則として、初日の日付のみ記しているので、それが何年何月であるのかは他の資料に拠らなければならない。役割番付に拠るのが最も確実であるが、そこまで確かめてはいない。それについては原則として、『歌舞伎年表』や、番付が所蔵されている図書館・博物館の記載を基に私見によったことをお断りしておきたい。

7　調査した機関は、早稲田大学坪内博士記念演劇博物館（「演博」と略記。以下同）・国立国会図書館（国会）・東京大学附属図書館（東図）・同国文学研究室（東研）・日本大学（日大）・阪急学園池田文庫（池田）のみであり、演劇博物館のものは写真版、東京大学国文学研究室と日本大学のものはＤＶＤ版、池田文庫のものは目録に拠った。それ以外の機関・個人は調査していないが、一部他の情報を加えたものもある。一つの機関で複数所蔵している場合は、括弧内に数字で示した。

	劇場名	上演初日年月日	外題・場名等	竪型・横型の別	所蔵	備考
1	中村	天明5.1.15	初花親曾我	横	演博・日大	
2	中村	天明5.2.3	初花親曾我第二番目	横	演博・日大	
3	中村	天明5.2.18	三つ人形の所作	竪	演博・国会	
4	中村	天明5.3.7	室町桜舞台	横	演博・国会・日大	
5	中村	天明5.4.8	室町桜舞台第二番目	横	演博・国会・日大	
6	中村	天明5.5.5	諸手綱親子心中	横	演博・国会(2)・日大	
7	中村	天明5.5.17	日本出世鑑	竪	演博・日大	
8	中村	天明5.6.14?	菅原伝授手習鑑	横	演博	旧版の再利用か
9	中村	天明5.7.15	稚馴染累詞	横	演博	
10	中村	天明5.8.1	稚馴染累詞第二番目	横	演博	
11	中村	天明5.9.16	織合襤褸錦	横	演博・国会	
12	中村	天明6.1(3).15	さるわか万代廈・道行色のいのじ	横	演博・国会・日大(2)	
13	中村	天明6.4.1?	棟上万代不易記	竪	演博	清長ではない
14	中村	天明6.5.5	六玉川□□□□		演博	旧版の再利用。清長ではない
15	中村	天明6.8.9	貢信田豊年	横	演博・国会・日大	
16	中村	天明6.8.27	貢信田豊年	横	国会	上記の日付のみ改刻
17	中村	天明7.1.8	大銀杏根元曾我	竪	演博・国会	
18	中村	天明7.3.15	助六名取八重桜	横	演博・国会	
19	中村	天明7.5.1	けいせい井堤蒲	横	演博	
20	中村	天明7.5.6	けいせい井堤蒲	横	国会	上記の日付のみ改刻
21	中村	天明7.8.13	今川本領貢入船	竪	演博	
22	中村	天明7.9.9	今川本領貢入船第二番目・浮名艸月小夜衣	横	演博	
23	中村	天明8.4.11	傾城吾嬬鑑	横	演博	

24	中村	天明8.5.5	傾城吾嬬鑑第二番目	竪	演博	
25	中村	天明8.7.15	高尾大明神楓籬	横	演博	
26	中村	天明8.9.9	月友宵宮五百崎・高尾大明神楓籬第二番目	竪	演博	
27	中村	天明8.9.11	月友宵宮五百崎・高尾大明神楓籬第二番目	竪	日大	上記の日付のみ改刻
28	中村	天明9.1	江戸富士陽曾我	横	演博・東図	
29	中村	寛政1.3.3	荏柄天神利生鑑・江戸富士陽曾我第二番目	横	演博・日大	
30	中村	寛政1.3.17	花頃誓十七夜待	竪	演博	
31	中村	寛政1.4.16	江戸富士陽曾我第二番目新狂言	竪	演博	
32	中村	寛政1.5.5	江戸富士陽曾我第二番目新狂言	横	演博	
33	中村	寛政1.5.15	江戸富士陽曾我第二番目大詰	竪	演博	富士の巻狩の陣幕紋尽くし
34	中村	寛政1.7.3	平家評判記	横	演博・日大	
35	中村	寛政1.7.21	寿世嗣三番叟	竪	演博	初日「廿三日より」と墨書
36	中村	寛政1.8.6	平家評判記第二番目新狂言	竪	演博・国会	
37	中村	寛政1.8.16	月友対道行・平家評判記第二番目	竪	演博	
38	中村	寛政2.1.15	春錦伊達染曾我	横	演博・日大	
39	中村	寛政2.2.7	春錦伊達染曾我第一番目六立目大詰	横	演博・日大	
40	中村	寛政2.3.3	春錦伊達染曾我第二番目	横	演博・日大	
41	中村	寛政2.4.1	物狂胡蝶袂・春錦伊達染曾我第二番目中幕	横	演博	
42	中村	寛政2.4.2	物狂胡蝶袂・春錦伊達染曾我第二番目中幕	横	演博	上記の日付のみ改刻
43	中村	寛政2.5.5	郭公殊月夜・春錦伊達染曾我第二番目三幕新狂言	横	演博・日大	
44	中村	寛政2.5.24	伊達染曾我まつり	横	演博・日大	
45	中村	寛政2.7.15	忠孝両国織	横	演博・日大	
46	中村	寛政2.8.16	忠孝両国織新狂言二幕	竪	演博・日大	
47	中村	寛政3.1.23	春世界花麗曾我	横	演博	
48	中村	寛政3.3.17	桜浮名朧夜・柳浮名春雨・春世界花麗曾我	横	演博・日大(2)	

49	中村	寛政3.4.11	助六縁牡丹	横	演博	
50	中村	寛政3.5.5	艶容浪花姓・五月菊名大津絵	横	演博・日大・東図	
51	中村	寛政3.5.16	ひらがな盛衰記	竪	演博・日大	
52	中村	寛政3.9.11	菊宴むかしの都	横	演博・日大	
53	中村	寛政4.3.15	隅田川劇場縁日・けいせい浅間嶽・道成寺花の面影	横	演博・日大・東図	
54	中村	寛政4.4.16	隅田川劇場縁日第二番目新狂言	横	演博・日大	
55	中村	寛政5.2.11	遇曾我中村	横	演博・国会・日大・東図	
56	中村	寛政5.3.3	遇曾我中村第二番目新狂言	横	演博	
57	都	寛政6.2.1	初曙観曾我	横	演博・日大	
58	都	寛政6.2	侠客形近江八景・達模様吾妻八景	横	演博	
59	都	寛政6.3.3	初曙観曾我第三番目	横	演博(2)・日大	
60	都	寛政6.3.23	初曙観曾我第三番目	横	演博・日大	上記とは別種のもの
61	都	寛政6.4.12	都座百六拾三年当寿都錦	横	国会	「鳥居清長画」とあり
62	都	寛政6.5.5	花菖蒲文禄曾我	横	演博	
63	都	寛政6.7.25	けいせい三本傘	横	演博・国会・日大	
64	都	寛政6.8.17	けいせい三本傘第二番目新狂言	竪	演博・国会・日大	
65	都	寛政6.9.9	義経千本桜・色競比翼塚	横	演博・日大・東図	
66	都	寛政6.閏11.1	花都廓縄張	竪	演博・国会・日大	
67	都	寛政7.1.15	江戸砂子慶曾我	横	演博	
68	都	寛政7.3.9	江戸砂子慶曾我第二番目新狂言・桃柳娘雛形・三瀬川吾妻人形	横	演博・国会	
69	都	寛政7.4.5	仮名手本忠臣蔵	横	国会(2)	
70	都	寛政7.7.20	遊女操吉原養育	横	国会(2)	
71	都	寛政7.8.7	遊女操吉原養育第二番目新狂言・容競出入湊	横	国会	
72	都	寛政7.8.19	一谷嫩軍記・容競出入湊	竪	国会・日大	
73	都	寛政7.9.9	蘆屋道満大内鑑	横	国会・東図	

74	都	寛政8.1.15	振分髪青柳曾我・帯文桂川水・浮偕吾妻森	横	日大	
75	都	寛政8.2.15	振分髪青柳曾我第二番目新狂言・京鹿子娘道成寺	横	演博・国会(2)・日大	
76	都	寛政8.3.3	敵討雛磯貝・京鹿子娘道成寺	横	日大	
77	都	寛政8.4.8	祇園祭礼信仰記・京鹿子娘道成寺	横	国会・日大	
78	都	寛政8.4.16	祇園祭礼信仰記・戻駕籠法志賀山	横	国会・日大	
79	都	寛政8.7.15	菅原伝授手習鑑	横	国会	
80	都	寛政8.8.10	新口村色出来秋	竪	演博・国会・日大	
81	都	寛政8.9.9	彦山権現誓助剣	横	演博・国会(3)・日大	
82	都	寛政9.1.15	江戸春吉例曾我・初霞廓巣籠	横	国会	
83	都	寛政9.2.4	江戸春吉例曾我第二番目・梅見月恋閣思君	横	国会(2)	
84	都	寛政9.3.9	御国名物花菅笠・初霞浅間嶽・英執着獅子	横	国会・日大	
85	都	寛政9.3.17	江戸春吉例曾我第二番目・初霞浅間嶽・英執着獅子	竪	国会(2)	
86	都	寛政9.4.10	いろは縁起・花扇邯鄲枕	横	国会・日大	
87	都	寛政9.5.5	ひらかな盛衰記	横	国会(2)・日大	
88	都	寛政9.6.15	大塔宮曦鎧・極彩色娘扇・義経千本桜	横	国会・日大	
89	都	寛政9.閏7.7	出世握虎軍配鑑	横	国会(2)・日大・東図	
90	都	寛政9.8.1	近江源氏先陣館・姿花秋七種	横	国会・日大・東図	
91	都	寛政9.8.16	近江源氏先陣館・姫小松子日の遊・姿花秋七種	竪	日大	
92	都	寛政9.9.9	十帖源氏物ぐさ太郎・行平磯馴松・丹州爺打栗	横	国会(5)・日大	
93	中村	寛政10.3.3	若駒驩曾我	横	国会・日大	
94	中村	寛政10.4.9	若駒驩曾我・大切中村富十郎追善妹背山	横	国会	
95	中村	寛政10.5.5	敵討染分纏・道成寺伝授睦言	横	国会(2)・日大・東図	
96	中村	寛政10.8.10	入船信田出来作	横	演博・国会(2)	
97	中村	寛政10.9.12	太平記忠臣講釈・北条時頼記	横	国会	
98	中村	寛政10.9.23	蘆屋道満大内鑑	竪	国会	

99	中村	寛政11.2.13	大三浦達寿・乱咲縁花笠	横	国会・日大	
100	中村	寛政11.3.3	助六廓の花見時	横	国会	
101	中村	寛政11.4.7	仮名手本忠臣蔵	横	国会(4)・日大	
102	中村	寛政11.4.20	仮名手本忠臣蔵切狂言七変化所作事花菖蒲曳手数多	竪	国会	
103	中村	寛政12.1.21	富士三升幸曾我・幡随長兵衛・妹背中結柏	横	国会(3)	
104	中村	寛政12.2.15	富士三升幸曾我第二番目	竪	日大	
105	中村	寛政12.3.23	意計高尾伊達染・蜀魂其夜の睦言・俊寛双面影	横	国会(2)・日大・東図	
106	中村	寛政12.4.6	俊寛双面影・織合会稽錦	横	国会(3)・日大・東図	
107	中村	寛政12.5.5	義経千本桜・道行初音の旅路	横	演博・国会(3)・日大	
108	中村	寛政12.5.25	江戸花五枚錦絵	竪	国会(2)・日大	
109	中村	寛政12.6.18	出世太平記・庚申若櫓鼓・筆跡倭撫子	竪	演博・国会(2)・日大	
110	中村	寛政12.7.15	けいせい屏風浦・蛍双色夕月	横	演博・国会(3)・日大・東図	
111	中村	寛政12.8.7	けいせい屏風浦第二番目・蛍双色夕月	横	国会(2)・日大	
112	中村	寛政12.9.11	赤松蟾兎見島台	横	国会(3)・日大(2)・東図	
113	中村	享和1.3.23	仮名手本忠臣蔵	竪	国会(2)・東図	
114	中村	享和1.5.9	今盛鳴門噺・辻花恋待合	横	国会(2)	
115	中村	享和1.7.13	妹背山婦女庭訓	横	国会・東図	
116	中村	享和1.9.18	源平布引滝・振袖隅田川・両顔月姿絵	横	国会(5)・東図	
117	中村	享和2.1.25	初舞台陽向曾我・霞袖春山寺・友呼声塒燕	横	国会(3)・東図	
118	中村	享和2.3.3	助六廓の江戸桜	横	演博・国会(3)	
119	中村	享和2.3.25	菅原伝授手習鑑・助六廓の江戸桜	横	国会・東図	
120	中村	享和2.4.11	想妻袷小袖・初舞台陽向曾我第三番目二幕	横	国会	
121	中村	享和2.5.23	彦山権現誓助剣・夏祭団七縞	竪	日大	
122	中村	享和2.8.9	伊賀越乗掛合羽	横	国会・日大・東図	
123	中村	享和2.9.27	伊賀越乗掛合羽・傾城廓文章	竪	国会	

124	中村	享和3.1.17	松春寿曾我・三重霞嬉敷顔鳥	横	国会	
125	中村	享和3.2.10	伊達染仕形講釈・道行嫁菜露	横	国会	
126	中村	享和3.4.2	仲蔵縞博多今織	横	演博・国会・東図	
127	中村	享和3.4.16	仲蔵縞博多今織第二番目・錦車縫裾卯の花	竪	国会(2)	
128	中村	享和3.6.5	仮名手本忠臣蔵	竪	国会	
129	中村	享和3.6.6	仮名手本忠臣蔵	2丁	国会	上記のものを役割番付に直したもの。日付を改刻。
130	中村	享和3.6.28	仮名手本忠臣蔵第十段目第十一段目	横	国会	
131	中村	享和3.8.27	菅原伝授手習鑑・幡随長兵衛精進俎板・萩薄露転寝	横	国会・東図	
132	中村	享和4.1.2	梶花御利生鉢木・命懸色の二番目	横	国会・日大	
133	中村	享和4.2.9	罷出邑助花・三人花真の道行	横	日大	
134	中村	文化1.3.17	一谷嫩軍記・長者丸釣鐘鋳桜・花筐鹿子道成寺・道行面影草	横	演博・日大	
135	中村	文化1.5.10	敵討薊組帯・花筐鹿子道成寺	横	演博(2)・国会・日大	
136	中村	文化1.8.13	義経千本桜・道行初音旅	竪	国会・日大	
137	中村	文化2.2.4	全盛虎女石・烏帽子紐解寝夜	横	国会・日大	
138	中村	文化2.3.3	法花四季台	竪	国会(2)	
139	中村	文化2.4.10	還供養妹背縁日・道行念玉蔓	横	国会(2)・日大(2)	
140	中村	文化2.5.5	虎女石後日狂言(夏祭浪花鑑)	竪	国会(2)・日大・東図	
141	中村	文化2.5.16	全盛虎女石後日狂言大切・姿花鳥居が色粉	竪	国会(2)・日大	
142	中村	文化2.7.20	けいせい鏡台山・三紅閨時酒	横	演博(2)・国会・日大(3)	
143	中村	文化2.閏8.1	月視月余慶讐討	横	演博・国会(4)・日大(2)・池田	
144	中村	文化2.閏8.16	月視月余慶讐討切狂言・太夫暫由縁月視	竪	演博	
145	中村	文化2.9.16	姫小松子日の遊・太夫暫由縁月視	横	国会・日大(2)・東図	
146	中村	文化3.1.17	念力箭立杉・我栖里春曾我菊・初音歌祭文	横	演博・国会・日大	
147	中村	文化3.2.6	念力箭立杉第二番目・初音歌祭文・道行柳朧夜・七字の花在姿絵	横	演博・国会・東図	
148	中村	文化3.3.6	館結花行列・七字の花在姿絵	横	演博・国会(2)・日大(3)	

149	中村	文化3.4.14	館結花行列・七字の花在姿絵	竪	演博・国会(3)	
150	中村	文化3.5.7	姫小松子日の遊	横	演博・国会(2)・日大(3)	
151	中村	文化3.7.28	初紅葉二樹讐討	横	演博・国会(2)・日大(2)・東図	
152	中村	文化3.9.9	初紅葉二樹讐討敵討の段	横	演博・国会	
153	中村	文化3.10.2	義経千本桜・道行初音旅	横	演博・国会(3)	
154	中村	文化4.3.27	さるわか栄曾我・其儘娘七種・助六桜の二重帯	横	演博(2)・国会(3)・池田	
155	中村	文化4.5.5	さるわか栄曾我第二番目(五節句の所作事)	横	演博(2)・国会(3)・池田	
156	中村	文化4.7.20	霊験鼎高嶺・八幡鐘更行夜中	横	演博(2)・国会(3)・日大	
157	中村	文化4.9.9	仮名手本忠臣蔵	横	演博・国会(4)・日大・東図	
158	中村	文化4.9.23	仮名手本忠臣蔵十段目十一段目	横	演博・国会(4)・東図	
159	中村	文化4.12.3	会稽雪木下第二番目大切・女鉢木雪のだん	横	国会・東図	
160	中村	文化5.1.2	妹背山婦女庭訓・女鉢木雪のだん	横	演博(2)・国会・日大・池田	
161	中村	文化5.2.5	初便春盤飾曾我・梅柳昔画冊	横	演博(2)・日大(3)	
162	中村	文化5.2.6	初便春盤飾曾我・梅柳昔画冊	横	国会・池田	上記の日付のみ改刻
163	中村	文化5.3.23	頃宿花児譜・桜艸対の靛	横	演博(4)・国会(3)・日大(2)・東図・池田	
164	中村	文化5.4.12	頃宿花児譜第二番目大切・堀川の段	竪	演博・東図	
165	中村	文化5.5.5	義経千本桜・幾菊蝶初音道行	横	演博(2)・国会・日大(2)・東研・池田	
166	中村	文化5.6.22	源平布引滝・染模様妹背門松・倭仮名在原系図	竪	演博・国会・東図・東研・池田	
167	中村	文化5.7.17	増補蹟仇討	横	演博(2)・国会(2)・日大(2)・東図	
168	中村	文化5.8.10	行平磯馴松・形見忍夫摺	横	演博(2)・国会・日大・東図	
169	中村	文化5.8.28	菅原伝授手習鑑	横	演博(4)・国会・日大・東図	
170	中村	文化5.9.24	菅原伝授手習鑑大切・恋女房染分手綱	竪	演博(3)・日大・東図	
171	中村	文化5.10.2	菅原伝授手習鑑切狂言・廓文章	竪	演博・国会・東図	
172	中村	文化6.3.23	花似想曾我・八百屋お七物語・艶容錦画姿	横	国会	
173	中村	文化6.3.24	花似想曾我・八百屋お七物語・艶容錦画姿	横	演博(4)・国会(2)・日大(2)・東研・池田	上記の日付のみ改刻

174	中村	文化6.4.17	花似想曾我後日狂言・秋葉権現廻船語・邯鄲園菊蝶	横	演博(2)・国会・日大・東研・池田	
175	中村	文化6.5.7	仮名手本忠臣蔵	横	演博(3)・国会・日大(2)・東図	
176	中村	文化6.7.15	高尾丸賀纜・色楓縁辻駕	横	演博(2)・国会・東研・池田	
177	中村	文化6.7.19	恋女房染分手綱・姫小松子日の遊	横	演博(3)・国会・東図	
178	中村	文化6.8.7	近江源氏先陣館・葱例跡色歌	横	演博(3)・日大(2)・東研・池田	
179	中村	文化6.9.17	競伊勢物語・廓文章	横	演博(2)・国会・日大(2)・東図	
180	中村	文化6.9.29	男一疋嫁入献立・廓文章	横	演博・国会・日大・東図	
181	中村	文化7.1.15	江戸春御摂曾我・花兄弟壮士春駒	横	国会	
182	中村	文化7.1.17	江戸春御摂曾我・花兄弟壮士春駒	横	演博(3)・日大(3)・東研・池田	上記の日付のみ改刻か
183	中村	文化7.3.3	江戸春御摂曾我後日狂言・楼門五山桐・隅田春妓女容性	横	演博(3)・日大・東研・池田	
184	中村	文化7.4.14	楼門五山桐・隅田春妓女容性・女鉢木	横	演博・日大・東図・池田	
185	中村	文化7.5.5	敵討相合袴	横	演博(2)・国会・日大・東研・池田	
186	中村	文化7.5.21	敵討相合袴切狂言・道行恋飛脚	竪	演博・国会(2)・日大・池田	
187	中村	文化7.7.15	道中娘菅笠	横	演博(3)・日大・東研・池田	
188	中村	文化7.8.17	道中娘菅笠第二番目新狂言・奉掛色浮世図画	横	演博・国会・東研・池田	
189	中村	文化7.9.9	伊達遊花街風俗	横	演博(3)・国会・日大・東研・池田	
190	中村	文化7.9.25	伊達遊花街風俗切狂言・義経腰越状	竪	演博(2)・日大・東図・池田	
191	中村	文化8.1.20	銀杏鶴曾我・廓罠春鐶菊・東都名物錦絵始・払暁鐘浅草	横	演博(2)・国会・日大(2)・東図・東研	
192	中村	文化8.2.15	銀杏鶴曾我第二番目・東都名物錦絵始大切・払暁鐘浅草	竪	演博・日大・東図	
193	中村	文化8.閏2.7	銀杏鶴曾我第二番目(加賀見山)	竪	演博・東図	
194	中村	文化8.3.5	年々歳々沙石川	横	演博・国会・日大・東図・東研・池田	
195	中村	文化8.3.15	年々歳々沙石川第二番目・浮名種艶油・花曇傘相合・遅桜手爾葉七字	横	演博・日大・東研	
196	中村	文化8.5.5	花菖蒲佐野八橋	横	演博・日大・東図(2)・東研・池田	
197	中村	文化8.5.17	花菖蒲佐野八橋第二番目大切	竪	演博(2)・日大(3)・池田	
198	中村	文化8.7.15	菅原伝授手習鑑	横	演博・国会・日大(3)・東研・池田	

199	中村	文化8.7.16	仮名手本忠臣蔵	横	演博・国会・日大(4)・東図・東研・池田	
200	中村	文化8.9.17	一谷嫩軍記・枝鶴紅葉賀	横	演博・日大(2)・東研・池田	
201	中村	文化9.1.15	名高富士根曾我・扇仝髭門松・台頭霞彩幕・其常磐津仇兼言	横	日大(2)・東研・池田	
202	中村	文化9.3.5	清水清玄面影桜・道行拙振袖・似紫鹿子道成寺	横	演博・日大・東研・池田	
203	中村	文化9.4.5	清水清玄面影桜第一番目新狂言・亀山染読切講釈・道行拙振袖・似紫鹿子道成寺	横	演博・日大	
204	中村	文化9.4.8	清水清玄面影桜第一番目新狂言・亀山染読切講釈・道行拙振袖・似紫鹿子道成寺	横	演博・日大	上記の日付のみ改刻
205	中村	文化9.5.5	皐連歌恋句白浪	横	演博(2)・日大・東研	
206	中村	文化9.7.15	太平記忠臣講釈・道行拙振袖	横	演博・日大(4)・東研	
207	中村	文化9.9.9	ひらがな盛衰記	横	演博(3)・日大(2)	
208	中村	文化9.9.9	ひらがな盛衰記第二番目切狂言・嫗山姥・再春菘種蒔・紅葉袖名残錦絵	横	演博(4)・日大(3)	
209	中村	文化10.1.11	春駒勢曾我・隈取霞帯曳・初便廓玉章・三度笠故郷春雨	横	演博・日大	
210	中村	文化10.2.5	春駒勢曾我第二番目・娘景清八島日記	竪	演博・日大	
211	中村	文化10.2.11	未咲花契言・沢紫鹿子道成寺	竪	演博	
212	中村	文化10.3.5	其面影伊達写絵・観瀬水扇楓	横	演博(2)・日大(2)	
213	中村	文化10.3.5	四季詠寄三大字	竪	演博(2)・日大	
214	中村	文化10.4.2	其面影伊達写絵	竪	日大	
215	中村	文化10.5.6	物ぐさ太郎・名所名所秀句の曙・封文其名顕・隙行駒七字法掛	横	演博・日大(2)	
216	中村	文化10.7.15	太平記菊水之巻	横	演博・日大(4)	
217	中村	文化10.7.15	短夜仇散書・文月恨鮫鞘・三重襷賄曙	横	演博(3)・日大(3)・東図	
218	中村	文化10.8.23	碁太平記白石噺・短夜仇散書	横	演博・日大(2)	
219	中村	文化10.9.9	蘆屋道満大内鑑・御名残尾花留袖	横	演博(3)・日大(3)・東図	
220	中村	文化10.9.16	(梅の由兵衛)	竪	演博・日大(2)	
221	中村	文化11.1.23	御贔屓延年曾我・咲分枕土俵・色情曲輪蝶花形・道行若菜の重褄	横	演博(2)	
222	中村	文化11.3.7	花雲宿色衣	横	演博・日大(3)・池田	

223	中村	文化11.3.7	寄三津再十二支	横	演博・日大(3)	
224	中村	文化11.3.18	花雲宿色衣第二番目新狂言	竪	演博(2)・日大(2)・東図	
225	中村	文化11.4.6	仮名手本忠臣蔵	横	演博・日大(2)・東図	
226	中村	文化11.5.7	夏祭浪花鑑・戻駕色相肩	横	日大(2)・東図・東研	
227	中村	文化11.6.18	双蝶蝶曲輪日記・戻駕色相肩	横	演博(2)・日大・東研・池田	
228	中村	文化11.7.15	双蝶々曲輪日記後日狂言・伊勢音頭恋寝刃	竪	演博(2)・日大(2)	
229	中村	文化11.8.6	伊賀越乗掛合羽	横	演博・日大(3)・東研・池田	
230	中村	文化11.9.9	八陣守護城・惣一座色の世界・富ヶ岡屏風八景・壇浦兜軍記	横	演博・日大(2)・東研	
231	中村	文化11.11.21	二人智座定第二番目・恋女房染分手綱・廓文章	横	演博(2)・日大(3)	
232	中村	文化12.1.15	伊達彩曾我雛形	横	演博・東図・東研	
233	中村	文化12.3.5	五大力艶湊	横	演博・日大(2)・東研	
234	中村	文化12.3.5	其九絵彩四季桜	横	演博(3)・日大(2)	
235	中村	文化12.4.18	五大力艶湊第二番目・ひらがな盛衰記・其九絵彩四季桜	横	演博(2)・日大(2)	
236	中村	文化12.5.5	祇園祭礼信仰記・句兄弟菖蒲帷子	横	演博・日大・東研	
237	桐	天明4.11	(式三番、桐座再興披露)	横	平野『鳥居清長画集』	署名「鳥居清長筆」。岩井半四郎参加のことが記されているのでかなり早くに作られたものか。
238	桐	天明4.11.1	(桐座再興口上図)	横	演博(2)・国会	
239	桐	天明5.1.17	重重人重歌曾我	横	日大	
240	桐	天明5.2.8	重重人重歌曾我第二番目・春昔由縁英	横	演博・国会・日大	
241	桐	天明5.3.3	重重人重歌曾我第二番目大詰まで・嬌柳妹背的	横	演博・日大(3)	
242	桐	天明5.3.24	江戸仕立団七縞	横	演博(2)・日大	
243	桐	天明5.4.20	江戸仕立団七縞第二番目新狂言・乱髪夜編笠・式三番	横	演博・日大	
244	桐	天明5.5.5	江戸仕立団七縞第二番目新狂言不残	横	日大	
245	桐	天明5.7.21	千代始音頭瀬渡	横	演博・日大	
246	桐	天明5.8.1	千代始音頭瀬渡第二番目新狂言	竪	日大	

247	桐	天明5.8.15	千代始音頭瀬渡・蘆屋道満大内鑑	横	日大	
248	桐	天明5.8.16	千代始音頭瀬渡第二番目不残	横	演博	
249	桐	天明6.3.16	大飾寿曾我・若菜摘野路手段	横	演博・日大・東図	
250	桐	天明6.5.15	大飾寿曾我第二番目	横	日大	
251	桐	天明6.8.18	室町孀文章	横	演博	
252	桐	天明6.9.9	室町孀文章第一番目新狂言・高麗菊浮名色入	竪	日大	
253	桐	天明7.1.15	雪薺褪曾我	横	日大	「来ル十一日より」の「一」の上に墨書で「五」と記入
254	桐	天明7.1.15	雪薺褪曾我	横	演博	上記の日付のみ改刻
255	桐	天明7.2.14	雪薺褪曾我新狂言	横	日大	
256	桐	天明7.3.5	都鳥弥生渡・花来塒色雞	横	日大	
257	桐	天明7.4.18	都鳥弥生渡第二番目	竪	日大	
258	桐	天明7.9.9	天竺徳兵衛故郷取舵・紅葉実能中	横	日大	
259	桐	天明8.2.20	浮名の初霞・世噂翌雪解	横	平野『鳥居清長画集』	
260	桐	天明8.5.5	艶郷習昼夜正説	横	演博	
261	桐	天明8.7.15	菅原伝授手習鑑	横	演博(2)・日大	
262	桐	天明8.8.16	高尾宮本地開帳	横	日大	
263	桐	天明8.9.9	高尾宮本地開帳第二番目新狂言・秋色姿菊蝶	横	演博・日大	
264	市村	天明9.1.15	恋便仮名書曾我・誓文色謂謎	横	日大	
265	市村	寛政1.3.3	其俤浅間嶽・石橋の所作	横	演博・日大(2)	
266	市村	寛政1.4.5	恋便仮名書曾我第二番目・艶容垣根雪	横	演博・東図	
267	市村	寛政1.閏6.8	太平記忠臣講釈	横	日大	
268	市村	寛政1.□.13	(不明)	横	平野『鳥居清長画集』	辻番付の下絵を掲載
269	市村	寛政1.8.5	姿伊達契情容儀	横	日大(2)	
270	市村	寛政1.9.9	姿伊達契情容儀第二番目切狂言・沍山路菊月	横	ボストン美術館	
271	市村	寛政2.1.15	うれしく存曾我	横	日大	

272	市村	寛政2.2.1	うれしく存曾我第二番目	横	日大	
273	市村	寛政2.3.15	花贈木母寺由来・吾嬬鳥娘道成寺・都鳥男浅妻・嬌柳朧黒髪	横	日大	
274	市村	寛政2.5.9	有職鎌倉山	横	日大	
275	市村	寛政2.6.15	四季風流彩色扇・ひらがな盛衰記・極彩色娘扇	横	演博・日大	
276	市村	寛政2.9.9	義経腰越状	横	日大(2)	
277	市村	寛政3.1.15	春色江戸絵曾我・百千鳥蝶羽根書	横	演博(2)・日大	
278	市村	寛政3.2.16	春色江戸絵曾我第二番目新狂言・褄褰跟振袖	横	演博・日大	
279	市村	寛政3.3.17	春色江戸絵曾我第二番目大詰	横	日大	
280	市村	寛政3.4.2	筆蕻荑壺碑・助六花街二葉草	横	演博	
281	市村	寛政3.6.12	義経千本桜	横	国会	
282	市村	寛政3.8.1	仮名書室町文談	横	演博・日大	
283	市村	寛政3.9.9	竹春吉原雀	竪	国会・日大	
284	市村	寛政4.2.14	若紫江戸子曾我第二番目	横	東図	「来ル十四日より」の「四」は墨書
285	市村	寛政4.2.16	若紫江戸子曾我第二番目	横	演博	「来ル十六日より」の「六」は墨書。上記と同一のもの。
286	市村	寛政4.4.6	花楊櫨白髪岸柳	横	日大	
287	市村	寛政4.8.5	むかしむかし掌白猿	竪	日大・東図	
288	市村	寛政4.9.15	妹背山婦女庭訓	横	日大	
289	市村	寛政5.2.1	貢曾我富士着綿・新曲かぐら獅子	横	日大・東図	
290	市村	寛政5.3.15	貢曾我富士着綿第二番目新狂言・(助六)	横	日大	
291	市村	寛政5.4.15	貢曾我富士着綿第二番目新狂言(大詰)	竪	日大(2)	
292	市村	寛政5.5.13	仮名手本忠臣蔵	横	国会・日大	
293	桐	寛政6.1.11	舞台花若栄曾我	横	演博	
294	桐	寛政6.2.9	舞台花若栄曾我第二番目	竪	日大	
295	桐	寛政6.3.3	舞台花若栄曾我第二番目新狂言	横	演博・日大	
296	桐	寛政6.3.15	贔曳花鐘入	横	日大	

297	桐	寛政6.4.8	舞台花若栄曾我第三番目新狂言	竪	日大	
298	桐	寛政6.5.5	敵討乗合話・花菖蒲思笄	横	ボストン美術館	
299	桐	寛政6.5.27	若栄曾我まつり	竪	日大・東図	
300	桐	寛政6.8.15	神霊矢口渡・四方錦故郷旅路	竪	国会・日大	二丁の役割番付に改変したものあり
301	桐	寛政6.8.24	四方錦故郷旅路第三番目切狂言・姫小松子日の遊	横	演博・日大	
302	桐	寛政6.閏11.1	男山御江戸磐石第二番目	横	日大	
303	桐	寛政7.1.15	再魁罧曾我・浪花衞別墅	横	ボストン美術館	
304	桐	寛政7.2.1	再魁罧曾我第二番目・八十八夜恨鮫鞘	竪	演博・国会	
305	桐	寛政7.2.13	再魁罧曾我後日狂言・八百やお七恋江戸染・筆茅針恋字	横	国会	
306	桐	寛政7.4.15	仮名手本忠臣蔵	横	日大	
307	桐	寛政7.5.12	染分手綱道中双六の段・忠臣蔵・蓬茸軒玉水・染分手綱十一段目	横	国会	
308	桐	寛政7.6.4	三浦大助紅梅靮・平家女護島・藍桔梗雁金五紋	竪	国会(2)	
309	桐	寛政7.6.17	藍桔梗雁金五紋・江戸紫娘道成寺	横	国会	
310	桐	寛政7.7.17	妹背山婦女庭訓・糸薄色苧環	横	国会	
311	桐	寛政8.1.27	曾我大福帳・文枕閨初恋・隅田春妓女容性	横	演博・国会・日大	
312	桐	寛政8.4.8	江戸花赤穂塩竈	横	演博(2)・国会・日大(2)	
313	桐	寛政8.5.5	恋闇皐月嫐・壇浦兜軍記	横	国会(2)・日大	「壇浦兜軍記」の部分だけ改刻したものと二種あり
314	桐	寛政8.5.20	恋闇皐月嫐・壇浦兜軍記・国性爺合戦	横	国会(2)・日大	
315	桐	寛政8.7.27	時花唄比翼三紋・菊花嘘仇夢	横	国会(4)・日大	
316	桐	寛政8.9.9	時花唄比翼三紋切狂言・彦山権現誓助剣	横	演博・国会(2)・日大	
317	桐	寛政8.9.25	彦山権現誓助剣切狂言・物ぐさ太郎	竪	国会(2)・日大	
318	桐	寛政9.1.13	大注連曾我門松・雛睦月三引・青楼詞合鏡	横	国会	
319	桐	寛政9.1.17	大注連曾我門松・雛睦月三引・青楼詞合鏡	横	国会	上記の日付のみ改刻
320	桐	寛政9.3.17	太平記菊水之巻	横	国会(2)・日大	

321	桐	寛政9.4.6	けいせい時雨桜・江戸紫娘道成寺・咲初花振袖	横	国会・日大(3)	
322	桐	寛政9.5.17	藍桔梗雁金五紋・江戸紫娘道成寺	横	日大(2)	
323	桐	寛政9.6.24	太平記忠臣講釈・積恋雪関扉	竪	国会・日大・東図	
324	桐	寛政9.閏7.15	月武蔵野秋狂言・道行恋思荷	横	演博・国会・日大	
325	桐	寛政9.9.9	菅原伝授手習鑑	横	国会(4)・日大(3)	
326	桐	寛政10.1.15	着衣始小袖曾我・髭豆男廓文車	横	演博	
327	桐	寛政10.3.3	澪標浪花眺・道行菜種裳	横	国会(3)	
328	桐	寛政10.4.12	着衣始小袖曾我第三番目新狂言	横	国会・日大(2)	
329	桐	寛政10.5.5	着衣始小袖曾我第四番目	竪	国会(3)・日大	
330	桐	寛政10.5.21	蘭奢待新田系図	竪	国会(2)	
331	桐	寛政10.6.7	道行恋飛脚	竪	日大	
332	桐	寛政10.6.20	双蝶蝶曲輪日記・蘆屋道満大内鑑・花鰄葛葉重	竪	国会(2)	
333	桐	寛政10.7.29	智仁勇三面大黒・十二段月粧	横	国会(2)・日大	
334	桐	寛政10.8.8	智仁勇三面大黒第二番目新狂言・大内山恋賊	竪	東図	
335	桐	寛政10.8.16	新うすゆき物語・のべの書置・恋の橋つくし	横	国会(3)・日大(3)	
336	桐	寛政10.9.9	其俤浅間嶽・相生獅子	?	東図	
337	桐	寛政10.9.29	御存五大力	竪	演博	
338	市村	寛政10.11.1	(櫓再興口上、翁)	横	演博	
339	市村	寛政11.1.15	大紋日花街曾我・六玉川衞柵・花姿詠千金	横	国会・日大(4)	
340	市村	寛政11.3.3	大紋日花街曾我第二番目新狂言(草履打)	竪	国会(4)・日大(2)	
341	市村	寛政11.4.8	袷小袖血汐染色・道行比翼袖屏風・大紋日花街曾我第三番目新狂言	横	演博・国会(2)・日大	
342	市村	寛政11.5.5	本朝廿四孝	横	国会(2)・日大(2)	
343	市村	寛政11.7.23	女文字筆墜	横	日大(2)	
344	市村	寛政11.7.26	女文字筆墜	横	国会(4)	上記と同一。「来ル廿六日より」の「六」を墨書にしたものと改刻したものと二種あり。

345	市村	寛政11.8.17	女文字筆陸・増補千両幟・浮名夜月洩世中	横	国会・日大・東図	
346	市村	寛政11.9.9	義経千本桜・差実爾初音色鳥・江戸紫男鑑	横	国会(3)・日大・東図	
347	市村	寛政12.1.15	梅薫誉曾我・仇競恋姿見	横	国会・日大(2)	
348	市村	寛政12.2.12	楼門五山桐・瀬川の仇浪	横	国会(6)・日大	
349	市村	寛政12.3.3	楼門五山桐第一番目六建目	竪	国会(2)・日大	
350	市村	寛政12.4.2	化粧六歌仙	竪	日大	
351	市村	寛政12.4.14	楼門五山桐後日・蜘糸曳渦巻	竪	国会(3)・日大	
352	市村	寛政12.閏4.2	男巻誓立願	横	国会(3)・日大・東図	
353	市村	寛政12.5.10	ひらかな盛衰記	横	演博・国会(2)	
354	市村	寛政12.5.21	艸閨鳥の庵	竪	国会(2)・日大	
355	市村	寛政12.6.16	源平布引滝・五大力恋緘	竪	演博・国会・日大(2)	
356	市村	寛政12.6.18	源平布引滝・五大力恋緘	竪	国会(2)	上記の日付のみ改刻
357	市村	寛政12.7.15	仮名手本忠臣蔵	横	国会(4)	
358	市村	寛政12.7.23	仮名手本忠臣蔵第二番目切狂言・沍山路菊月	横	演博	「来ル廿三日より」の「三」は墨書
359	市村	寛政12.7.23	仮名手本忠臣蔵第二番目切狂言・沍山路菊月	横	国会	上記と同一。日付は版刻。
360	市村	寛政12.8.16	物ぐさ太郎	横	国会(5)・日大(2)	
361	市村	寛政12.9.9	菅原伝授手習鑑	横	国会(2)・日大	
362	市村	寛政13.1.17	通花街馴初曾我・孌百人一首・恋いろは匂書始	横	日大	
363	市村	享和1.2.17	通花街馴初曾我第二番目新狂言・今様雌雄麑石橋	竪	国会・日大	
364	市村	享和1.3.3	比良嶽雪見陣立・桃桜雛世帯・道行恋蝶菜花盛	横	国会(2)・日大(2)	
365	市村	享和1.4.14	全盛伊達曲輪入・茂懺悔睦言・増補むめのよし兵衛	横	国会・日大(3)	
366	市村	享和1.5.21	祇園祭礼信仰記	竪	国会(3)	
367	市村	享和1.8.19	敵討隠雁的	横	国会(4)・日大・東図	
368	市村	享和1.9.9	敵討隠雁的第一番目大切	竪	日大	
369	市村	享和1.9.27	敵討隠雁的第二番目新狂言・堂島田実畳	竪	日大	

370	市村	享和2.1.19	三国一纈盞・花恋月夜里	横	日大	
371	市村	享和2.3.18	天満宮菜種御供	横	国会	
372	市村	享和2.5.19	太平記忠臣講釈・新艘本朝丸	横	国会(3)	
373	市村	享和2.8.1	棹歌恋白浪・信田妻名残狐別・爰双吾妻菊	横	演博・国会・東図	
374	市村	享和3.閏1.1	歳男徳曾我・江戸紫由縁十徳・乱候柳黒髪	横	演博・国会(2)・日大	
375	市村	享和3.2.7	歳男徳曾我第二番目・江戸紫由縁十徳・乱候柳黒髪	竪	日大	
376	市村	享和3.3.11	歳男徳曾我第二番目新狂言(草履打)	竪	演博・国会	寛政11.3.3市村座の版木を流用し、顔・紋と文字の一部を改刻
377	市村	享和3.5.14	歳男徳曾我第三番目・のべの書残	竪	国会(2)・日大	
378	市村	享和3.6.8	太平記忠臣講釈・五大力恋緘	竪	国会(3)・日大	
379	市村	享和3.7.15	積恋雪関扉	竪	国会・日大	
380	市村	享和3.8.7	義経千本桜・恋中車初音の旅・桂川纈月見・恋栞萩玉鉾	横	演博・東図	
381	市村	享和3.9.9	妹背山婦女庭訓	横	演博・国会(2)・日大(2)	
382	市村	享和3.9.16	月名残誓約石山	横	演博・国会・東図	
383	市村	享和3.9.24	仮名手本忠臣蔵	横	国会	
384	市村	享和4.1.20	梅桜松曾我	横	国会(2)・日大(2)	
385	市村	文化1.2.20	四花菱比翼吉原・其妹背花朧・四紅葉思恋深川・妻夫事雨柳	横	国会(4)・日大(2)・東図	
386	市村	文化1.4.5	梅桜松曾我第二番目・卯花恋中垣・時鳥夢生玉	横	国会・日大・東図	
387	市村	文化1.6.16	ひらかな盛衰記・青楼詞合鏡	竪	国会・日大(3)	
388	市村	文化1.7.15	其俤浅間嶽	竪	国会・日大(2)・東図	
389	市村	文化1.7.26	碁太平記白石噺	横	国会(2)・日大(2)・東図	
390	市村	文化1.9.9	漢人韓文手管始・吉原俄番付・全盛操花車	横	国会	
391	市村	文化2.2.16	花雲曙曾我・江戸性男鑑・末結女夫柳	横	国会(2)・池田	
392	市村	文化2.12(3).3	花雲曙曾我第一番目・恋相場身請入札第二番目	竪	東図	「来ル十二月三日より」とあり
393	市村	文化2.3.3	花雲曙曾我第一番目・恋相場身請入札第二番目	竪	国会(2)	上記と同一のもの。「来ル三月三日より」とあり。

394	市村	文化2.3.27	伊達姿花見御殿・二世の縁青葉楓	横	国会(2)・日大(2)	
395	市村	文化2.4.27	花菖蒲浮木亀山	横	国会・日大・東図(2)	
396	市村	文化2.5.7	男作五雁金	竪	国会(3)・日大・東図	
397	市村	文化2.5.13	花菖蒲浮木亀山第二番目・橘古巣玉垣	竪	国会・日大・東図	
398	市村	文化2.6.12	双蝶々曲輪日記・姫小松子日の遊	竪	国会(2)・日大(2)	
399	市村	文化2.7.15	源平布引滝・双蝶々曲輪日記・姫小松子日の遊	竪	国会(2)・日大(2)・東図	
400	市村	文化2.閏8.1	小室節錦江戸入・茲来着綿菊娵入・女郎花桂曙	横	演博・国会(4)・日大(2)	
401	市村	文化2.9.9	木下蔭狭間合戦	竪	演博(2)・国会(3)・日大・東図	
402	市村	文化3.1.21	梅柳魁曾我・其画寅試筆	横	演博・国会・日大(2)・池田	
403	市村	文化3.1.21	略三五大切・仇枕夢玉鉾・河原噂京諺・比翼鳥部山	横	演博・国会・日大(2)・東図	
404	市村	文化3.3.3	梅柳魁曾我第二番目大詰新[illegible]言	竪	演博・国会(2)・日大・東図	
405	市村	文化3.4.14	仮名手本忠臣蔵	横	演博・国会(3)・東図・池田	
406	市村	文化3.5.5	仮名手本忠臣蔵十段目十一段目	横	演博・国会(2)・日大(2)・東図	
407	市村	文化3.6.18	波枕韓聞書	竪	国会・日大・東図	
408	市村	文化3.9.9	湖月照天松	竪	演博・国会(3)・日大・東図	
409	市村	文化3.9.17	花兄幡随長兵衛・恋結露菊蝶	横	演博・国会(3)・日大(2)・東図・池田	
410	市村	文化3.9.27	織合襤褸錦	横	演博・国会(2)・日大(2)・東図	
411	市村	文化4.2.5	壮平家物語	竪	演博・国会(2)・日大・東図	
412	市村	文化4.3.7	橘盤代曾我・其庵模様五節句・往昔元吉原	横	演博(3)・国会(3)・日大・池田	
413	市村	文化4.4.5	橘盤代曾我第二番目大詰・追善丸伊左衛門・道行菜種裳	横	国会(2)	
414	市村	文化4.4.6	橘盤代曾我第二番目大詰・追善丸伊左衛門・道行菜種裳	横	国会・日大・東図	上記の日付のみ改刻
415	市村	文化4.5.5	陌頭岸柳島・京鹿子娘道成寺	横	演博・国会(3)	
416	市村	文化4.6.20	三国妖婦伝・本律糸のしらべ	横	国会(5)・日大・東図	
417	市村	文化4.8.22	金龍山創磐・魂縷結千種朝露	横	国会(4)・日大	
418	市村	文化4.9.16	金龍山創磐第二番目・桂川連理柵	横	演博・国会(4)・日大・東図	

419	市村	文化4.10.2	金龍山創磐第二番目大詰・けいせい返魂香・其手向法大津絵	竪	演博・国会(3)・東図	
420	市村	文化5.1.13	月梅和曾我・解初霞帯曳・春商恋山崎	横	演博・国会(2)・東図・池田	
421	市村	文化5.2.4	月梅和曾我第二番目・春商恋山崎	竪	演博・国会(2)・日大・東図	
422	市村	文化5.3.3	伊達競阿国戯場・恨衣棣棠累	横	演博(3)・国会(2)・日大・池田	
423	市村	文化5.4.8	伊達競阿国戯場後日狂言・道行初時鳥	横	日大	「来ル八日より」の「八」の上に「九」と墨書
424	市村	文化5.4.9	伊達競阿国戯場後日狂言・道行初時鳥	横	演博・国会・日大・東図	
425	市村	文化5.5.5	仮名手本忠臣蔵	横	演博(3)・国会(2)・日大・東図・池田	図の部分は文化3.4.14を流用し紋を改刻
426	市村	文化5.5.16	本朝廿四孝	横	演博(3)・国会(2)・日大・東図	
427	市村	文化5.5.16	垣衣艸手向発心	横	演博(3)・国会(3)・日大・東図	
428	市村	文化5.閏6.6	彩入御伽艸・蝉時雨恨刃	横	演博・国会(2)・日大(2)・東図(2)・池田	
429	市村	文化5.閏6.8	彩入御伽艸・蝉時雨恨刃	横	国会	上記の日付のみ改刻
430	市村	文化5.7.5	彩入御伽艸後日狂言	竪	演博(2)・国会(2)・日大	
431	市村	文化5.7.25	時桔梗出世請状	横	演博(3)・国会(2)・日大・東図・池田	
432	市村	文化5.8.10	時桔梗出世請状後日・是筐残高麗屋縞	横	演博(2)・国会・日大・東図・池田	
433	市村	文化5.9.9	鳴響御未刻太鼓	横	演博(3)・国会(2)・日大・東図	
434	市村	文化5.9.21	鳴響御未刻太鼓第二番目・三扇法絵合	竪	日大	
435	市村	文化5.9.22	鳴響御未刻太鼓第二番目・三扇法絵合	竪	演博・国会・東図	上記の日付のみ改刻
436	市村	文化6.4.5	霊験曾我籬・元為見花所領椎	横	演博(3)・国会(3)・日大(2)・池田	
437	市村	文化6.5.5	霊験曾我籬第二番目新狂言	横	演博・国会(2)・日大・東図	
438	市村	文化6.6.12	日本振袖始・御祭礼端午帷子	横	演博(2)・国会・日大・東図	
439	市村	文化6.6.24	蘆屋道満大内鑑・道行信田二人妻	竪	演博(2)・国会・日大(2)・東図	
440	市村	文化6.7.15	魂祭お七の追善・新煖房雛世話事・道行手向の花曇	横	演博(3)・国会・日大・東図	
441	市村	文化6.8.17	ひらがな盛衰記・富岡恋山開	横	演博(2)・日大・東図	
442	市村	文化6.9.16	高麗大和皇白浪	横	演博(3)・国会・日大・池田	

443	市村	文化7.1.15	春栄松曾我・祐成寄書初・心謎解色糸	横	演博(3)・日大(2)	
444	市村	文化7.3.6	楼門五山桐・勝相撲浮名花触・風誘鐘四竹	横	演博(3)・日大(3)・池田	
445	市村	文化7.4.12	楼門五山桐後日・沢紫鹿子道成寺	横	演博(3)・国会・日大(2)・東図	
446	市村	文化7.5.5	絵本合法衢	横	演博・国会・日大・池田	
447	市村	文化7.6.22	閨扇墨染桜・尾上の鐘忍夜話	横	演博(3)・国会・日大(3)・池田	
448	市村	文化7.7.15	閨扇墨染桜増補新狂言・尾上の鐘忍夜話	竪	演博(2)・日大(3)・東図	
449	市村	文化7.8.17	当秋八幡祭	横	演博(2)・国会(2)・日大・池田	
450	市村	文化7.9.15	当秋八幡祭第二番目大切・千種の花色世盛	横	演博(3)・国会・日大(2)・東図	
451	市村	文化8.1.17	陬蓬莱曾我・仕立莅昔綺・袖浦誓中偕	横	演博(4)・国会・日大(3)・東図・池田	
452	市村	文化8.2.18	陬蓬莱曾我第二番目・助六所縁江戸桜	横	演博・東図・池田	
453	市村	文化8.閏2.3	陬蓬莱曾我第二番目(草履打)	竪	演博	
454	市村	文化8.3.6	嗑話水滸伝・七枚続花の姿絵	横	演博(2)・日大	
455	市村	文化8.4.8	嗑話水滸伝第二番目後日狂言・七枚続花の姿絵	竪	演博(2)・国会・日大(2)・東図	
456	市村	文化8.5.1	伊賀越乗掛合羽	横	演博(2)・日大(2)・東図・池田	
457	市村	文化8.5.5	伊賀越乗掛合羽大切	横	国会・日大(2)	
458	市村	文化8.5.17	御註文仕入茜染	横	演博(3)・日大・東図	
459	市村	文化8.7.18	玉藻前尾花錦繡・苅枕露濡事・謎帯一寸徳兵衛	横	演博(4)・国会・日大(2)	
460	市村	文化8.9.16	義経千本桜・道行初音旅	横	演博(2)・東図・池田	初日は貼紙か改刻
461	市村	文化9.1.17	初菘鶯曾我・三津朝床敷顔触・色一座梅椿	横	演博・池田	
462	市村	文化9.3.5	姿花江戸伊達染・其俤浅間嶽・深見草相生獅子	横	演博(2)・日大(2)・東研・池田	
463	市村	文化9.4.11	嫗山姥	竪	演博・日大(2)	
464	市村	文化9.5.5	菖蒲太刀利生鑑	横	演博(3)	
465	市村	文化9.5.11	妹背山婦女庭訓・誂繻子帯屋	横	演博(2)・日大	
466	市村	文化9.6.16	京詣雷神桜	横	演博(4)・日大(2)・池田	
467	市村	文化9.6.16	其姿まゐらせ候・散書仇名かしく	横	演博(2)・日大(2)・池田	

468	市村	文化9.9.1	菅原伝授手習鑑	横	演博(2)・日大(2)	
469	市村	文化10.1.26	花挿俤曾我・牛房髭御節献立・花昏待乳山清攬・濡扇恋朧夜	横	演博・日大(3)	
470	市村	文化10.3.12	添削信仰記・心中嫁菜露・爰咲似山桜	横	演博(4)・日大(2)	
471	市村	文化10.4.5	仮名手本忠臣蔵・爰咲似山桜	横	演博・日大	
472	市村	文化10.6.24	ひらがな盛衰記・釜渕双級巴・近頃河原の達引	横	演博(2)・日大(2)	
473	市村	文化10.8.15	尾上松緑洗濯話・累渕扨其後・閏茲姿八景	横	演博(3)・日大(2)	
474	市村	文化11.3.3	隅田川花御所染・都鳥名所渡	横	日大	
475	市村	文化11.5.19	復再松緑刑部話・傚三升四季俳優	横	演博・東図	
476	市村	文化11.5.22	復再松緑刑部話・傚三升四季俳優	横	演博(2)・日大(4)・東図	上記の日付のみ改刻
477	市村	文化11.6.16	桂川縁仇浪	竪	日大(3)	
478	市村	文化11.7.24	新織博多縞入船・もと様参かしく文月	横	演博(2)・日大(2)	
479	市村	文化11.8.10	新織博多縞入船切狂言・廓文章	竪	演博・日大	初日の日付は改刻
480	市村	文化11.8.11	新織博多縞入船切狂言・廓文章	竪	演博・日大(2)	上記の日付のみ改刻
481	市村	文化11.8.28	染繼竹春駒	横	演博(3)・日大(2)	
482	市村	文化11.9.14	染繼竹春駒大切・四季写記念紅筆	横	演博(2)	
483	市村	文化12.1.15	増補富士見西行・其盞色三組	横	日大(2)	
484	市村	文化12.2.8	増補富士見西行第二番目大詰・御存江戸絵風流	竪	演博(2)・日大(3)	
485	市村	文化12.3.3	義経千本桜	横	演博(2)・日大(3)	
486	市村	文化12.3.17	義経千本桜後日第二番目・八重霞桜花掛合	横	演博(2)・日大(3)	
487	市村	文化12.4.12	義経千本桜後日狂言第二番目・郭公色夜話・八重霞桜花掛合	横	演博(2)・日大(2)	
488	市村	文化12.5.19	箱根霊験覿仇討・今様須磨の写絵	横	演博(4)・日大	
489	森田	天明6.2.9	花御江戸恵曾我・振袖染分道成寺・色手綱前髪角力	横	演博・日大	
490	森田	天明6.3.9	花御江戸恵曾我第二番目	横	演博	
491	森田	天明6.5.23	花御江戸恵曾我後日・国性爺合戦	竪	演博	
492	森田	天明7.1.15	花入庵初会曾我	横	演博	

493	森田	天明7.2.11	花入庵初会曾我第二番目新狂言・京鹿子娘道成寺	竪	演博	
494	森田	天明7.3.18	花入庵初会曾我第二番目新狂言・散残花貝鳥	竪	演博	
495	森田	天明7.4.17	花入庵初会曾我第二番目大詰	竪	演博・日大	
496	森田	天明8.1.21	雛形稚曾我	横	演博	
497	森田	天明8.3.7	雛形稚曾我第一番目第二番目・垣衣恋写絵	横	演博・日大	
498	森田	天明8.4.9	仮名手本忠臣蔵	竪	演博	
499	河原崎	寛政3.2.7	初緑幸曾我	竪	演博・日大(2)	
500	河原崎	寛政3.3.3	初緑幸曾我第二番目・過恋深山桜	横	演博	
501	河原崎	寛政3.4.15	初緑幸曾我第二番目三幕新狂言	横	演博・日大	
502	河原崎	寛政3.5.5	初緑幸曾我第二番目残らず・席書墨絵の富士	横	演博・日大	
503	河原崎	寛政3.6.17	女達高麗屋経緯	竪	演博・日大	左下には「六月十五日ヨリ」とあり
504	河原崎	寛政3.8.1	増補夏祭中の巻・細工業雛出来秋	横	演博・日大(2)・東図	
505	河原崎	寛政3.9.9	女達高麗屋経緯十一段目二幕	横	演博・日大	
506	河原崎	寛政3.9.22	女達高麗屋経緯十一幕続下の巻	竪	演博・日大	
507	河原崎	寛政3.9.27	女達高麗屋経緯切狂言・俊寛島物語	横	演博・日大	
508	河原崎	寛政4.1.23	けいせい金秤目	竪	演博・日大	
509	河原崎	寛政4.3.3	けいせい金秤目第二番目	竪	演博・日大	
510	河原崎	寛政4.4.6	けいせい金秤目第二番目・恋衣縁初桜	横	演博・日大	
511	河原崎	寛政4.4.18	けいせい金秤目第二番目大詰・杜若七重の染衣	横	演博	
512	河原崎	寛政4.5.5	忠臣伝仕形講釈・富貴曾我裾野睦	横	演博	
513	河原崎	寛政4.6.20	極彩色娘扇	竪	演博	
514	河原崎	寛政4.8.23	神明祭祀女団七・花信時雨森・蘆屋道満大内鑑	横	演博・日大	
515	河原崎	寛政5.1.13	御前懸相撲曾我	横	演博・日大	
516	河原崎	寛政5.2.1	御前懸相撲曾我第二番目	横	演博・日大	
517	河原崎	寛政5.3.4	御前懸相撲曾我第二番目・桜花恋巣籠	横	演博・日大・東図	

518	河原崎	寛政5.4.2	御前懸相撲曾我第二番目・英名鏃五郎	横	演博・日大	
519	河原崎	寛政5.5.5	潤色八百屋お七・時鳥夢路恋	横	演博・日大・東図	
520	河原崎	寛政5.5.27	寛活そがまつり	横	演博・日大	
521	河原崎	寛政5.7.15	潤色八百屋お七続狂言三幕	横	日大	
522	河原崎	寛政5.7.20	潤色八百屋お七続狂言三幕	横	演博	上記の日付のみ改刻
523	河原崎	寛政5.8.7	姫小松子日の遊	横	演博・日大	
524	河原崎	寛政5.8.24	姫小松子日の遊続狂言三幕	竪	演博・日大	
525	河原崎	寛政5.9.17	姫小松子日の遊続新狂言二幕・江戸紫娘道成寺	横	演博・日大	
526	河原崎	寛政5.11.15	三扇屋所縁紙子・花麗源氏花咲門	竪	演博	
527	河原崎	寛政6.1.13	御曳花愛敬曾我	横	演博・日大	
528	河原崎	寛政6.3.3	御曳花愛敬曾我第二番目・色雉子浮名夜桜	横	演博	
529	河原崎	寛政6.4.2	御曳花愛敬曾我第二番目・色垣衣娘售	横	演博	
530	河原崎	寛政6.5.5	恋女房染分手綱・時鳥花有里・義経千本桜	横	演博・日大	
531	河原崎	寛政6.5.27	曾我まつり	横	演博	
532	河原崎	寛政6.8.7	二本松陸奥生長・桂川月思出	横	演博・東図	
533	河原崎	寛政6.9.9	二本松陸奥生長第二番目新狂言・紅葉禍錦滝	横	演博	
534	河原崎	寛政6.9.21	仮名手本忠臣蔵	竪	演博・日大	
535	河原崎	寛政6.閏11.1	松貞婦女楠・春待猫妻乞	横	演博	
536	河原崎	寛政7.2.7	注連餝吉例曾我	横	演博・国会	初日の日付「十五日」の上から「七日」と墨書
537	河原崎	寛政7.8.1	全盛東伽羅・色懺悔野辺花道	横	国会(2)	
538	河原崎	寛政7.9.9	全盛東伽羅第二番目	竪	国会・日大	
539	河原崎	寛政7.9.21	妹背山婦女庭訓	竪	国会	
540	河原崎	寛政8.2.2	柳桜曾我慟・仇恋名画の通路	横	国会・日大・東図	
541	河原崎	寛政8.3.25	太平記忠臣講釈・亀屋縞裏山富貴・燕鳥故郷軒	竪	日大	
542	河原崎	寛政8.8.5	けいせい水滸伝・丹前出口揚柳島	横	国会・日大	

543	河原崎	寛政9.1.20	富士見里和曾我・思春娘嬌巳年	横	国会(2)	
544	河原崎	寛政9.3.3	富士見里和曾我・助六廓桜人	横	日大	
545	河原崎	寛政9.4.8	富士見里和曾我第二番目新狂言	横	日大	
546	河原崎	寛政9.4.9	富士見里和曾我第二番目新狂言	横	国会・日大	
547	河原崎	寛政9.4.25	関取菖蒲絺	竪	演博	
548	河原崎	寛政9.5.5	関取菖蒲絺	竪	国会(2)・日大	上記の日付のみ改刻
549	河原崎	寛政9.6.8	富士見里和曾我後日狂言・関取菖蒲絺	竪	国会(3)・千葉市美術館	
550	河原崎	寛政9.7.20	時今蓮花魁・詩和歌分根牡丹	横	国会・日大	
551	河原崎	寛政9.8.15	とくさま参お初天神・全盛操花車	横	国会・日大	
552	河原崎	寛政9.9.3	貢物志賀入船	横	国会(2)・日大・東図	
553	森田	寛政10.2.1	鏡万代曾我・市川団蔵待受噺・東下花関札	横	国会・日大	
554	森田	寛政10.2.3	市川団蔵待受噺	竪	国会	
555	森田	寛政10.7.15	桂男刃大剣・織合襤褸錦	横	国会・日大(3)・東図	
556	森田	寛政10.8.16	源平布引滝	竪	国会・日大	
557	森田	寛政10.9.9	妹背山婦女庭訓・振袖隅田川・両顔月姿絵	横	国会(2)・日大・池田	
558	森田	寛政11.1.13	彦山権現誓助剣	横	国会(2)・日大	
559	森田	寛政11.3.11	伊達衣裳曲輪好・八重単操の桜戸	横	国会(4)・日大	
560	森田	寛政11.4.6	伊達衣裳曲輪好・京鹿子娘道成寺	竪	国会(4)・日大	
561	森田	寛政11.5.7	菅原伝授手習鑑・京鹿子娘道成寺	竪	演博・国会・日大	
562	森田	寛政11.6.19	関取千両幟・姻袖鏡	竪	国会	
563	森田	寛政11.9.9	仮名手本忠臣蔵・三度笠恋の乗掛	横	国会・日大(2)	
564	河原崎	寛政13.1.17	的当歳初寅曾我・奇花文渦巻	横	演博・国会(2)	
565	河原崎	享和1.2.13	花鳥朧乗掛・月梅思春雨	横	演博・国会・日大	
566	河原崎	享和1.3.3	的当歳初寅曾我第二番目	横	演博・国会(2)	
567	河原崎	享和1.3.25	的当歳初寅曾我第二番目・江の島奉納見台	横	演博・国会・日大	

568	河原崎	享和1.5.7	皐花吉岡染	横	国会(2)	
569	河原崎	享和1.5.25	的当歳初寅曾我御祭・花屋台見物左衛門	竪	演博	
570	河原崎	享和1.7.15	妹背山婦女庭訓	横	演博・国会(3)・日大・東図	
571	河原崎	享和1.8.13	厥紫四季の家橘	竪	演博・国会・日大	
572	河原崎	享和1.9.15	仮名手本忠臣蔵	竪	演博(2)・国会(3)・東図	
573	河原崎	享和1.9.15	仮名手本忠臣蔵	3丁	国会	上記のものを役割番付に仕立て直したもの。
574	河原崎	享和1.11.9	(名歌徳三升玉垣・四立目)	竪	演博	本屋半兵衛版。清長ではない。
575	河原崎	享和2.1.29	初紋日扮飾曾我・三浦の片貝操車	横	演博・国会(2)	
576	河原崎	享和2.3.3	初紋日扮飾曾我第二番目・結勠鹿子道成寺	竪	演博・国会(2)	
577	河原崎	享和2.4.5	郭公相宿話・結勠鹿子道成寺	横	演博・国会・東図	
578	河原崎	享和2.5.5	郭公相宿話第二番目	横	演博・国会(2)・日大	
579	河原崎	享和2.6.24	夏祭浪花鑑	竪	演博	
580	河原崎	享和2.8.10	(参考)柱立披露口上書	横	国会	絵入
581	河原崎	享和2.9.29	九月花双重雛形・源平布引滝・お俊伝兵衛・道行栄花月	横	演博・日大	
582	河原崎	享和2.11.21	義経千本桜	竪	日大	
583	河原崎	享和3.閏1.13	世響音羽桜・娘形外媚道成寺	横	演博・国会・日大・東図	
584	河原崎	享和3.2.2	姫小松子の日遊・伊勢音頭恋寝剣・娘形外媚道成寺	横	演博・国会(2)・日大	
585	河原崎	享和3.8.17	花櫓助飛入相撲・色揚古手屋仕込・紅葉瀬川月	横	演博・国会・日大(2)	
586	河原崎	享和4.2.6	戯場花女絵曾我・蝶衛松太夫・二人女房仲も由兵衛	横	国会(2)	
587	河原崎	文化1.3.11	戯場花女絵曾我第二番目大詰・恋衣俤花王	竪	演博・国会・東図	
588	河原崎	文化1.5.15	おやま紅対艶姿	横	演博・国会	
589	河原崎	文化1.7.3	天竺徳兵衛韓噺	竪	演博・国会・日大	
590	河原崎	文化1.7.3	天竺徳兵衛韓噺	3丁	国会	上記のものを役割番付に仕立て直したもの。上記に「河原長十郎」とあったものを「河原崎長十郎」に直している。

591	河原崎	文化1.8.13	天竺徳兵衛韓噺第二番目後日・色取名画家土産・七種秋錦絵	横	演博・国会(2)	
592	河原崎	文化1.9.12	恋手取相撲番付	横	演博・国会・日大	
593	河原崎	文化1.9.29	仮名手本忠臣蔵	横	演博・国会(2)・日大・東図	
594	河原崎	文化2.2.1	御江戸花賑曾我・初霞由縁蝶	横	演博・国会(3)・日大	
595	河原崎	文化2.3.21	御江戸花賑曾我後日・(鏡山故郷錦絵)・助六由縁江戸桜	横	国会	
596	河原崎	文化2.6.10	仮名手本忠臣蔵	竪	演博・東図	
597	河原崎	文化2.7.15	仮名手本忠臣蔵第十段目	竪	演博・国会(2)・東図	
598	河原崎	文化3.1.23	三津誉会稽曾我・睦屠蘇猿隈	横	国会(2)・東図	
599	河原崎	文化3.3.3	三津誉会稽曾我・京鹿子娘道成寺	竪	演博・国会	
600	河原崎	文化5.1.13	ひらかな盛衰記・染模様妹背門松・翠恋柳朧夜	横	演博・国会・東図	
601	河原崎	文化5.3.17	菅原伝授手習鑑	横	国会・日大	
602	森田	文化5.4	森田座再興(式三番叟)	横	国会(2)・池田	「鳥居清長画」とあり
603	森田	文化5.閏6.1	時為得花栄森田・垣衣昔雛形・褄捗恋賤女	横	国会(2)・東図・池田(2)	
604	森田	文化5.閏6.22	一谷嫩軍記・姫小松子日の遊	竪	演博・国会	
605	森田	文化5.9.19	双蝶々曲輪日記・平家女護島	竪	演博・東図	
606	森田	文化6.1.25	御贔屓新玉曾我・御慶候初音の鶯・花暦開紀行	横	演博・国会(2)・池田	
607	森田	文化6.2.18	花暦開行記第二番目・道行柳春雨	竪	国会	
608	森田	文化6.3.3	其往昔恋江戸染・新媛房雛世話事・道行手向の花曇	横	国会・日大・東図	
609	森田	文化6.6.11	阿国御前化粧鏡	横	演博・国会・日大・池田	
610	森田	文化6.8.16	義経千本桜・けいせい返魂香・有土佐容形写絵	横	東図	
611	森田	文化6.9.9	けいせい返魂香・有土佐容形写絵・関取二代勝負付・廓文章	横	演博	
612	森田	文化6.11.12	四天王嫩功・山又重山雲彩色	竪	演博	
613	森田	文化7.1.23	八陣守護城・刀屋半七浮名の深川・恋路の真崎	横	演博・国会・池田	
614	森田	文化7.3.3	八陣守護城第二番目・隅田川続俤・鐘鳴朧写絵	横	国会・東図・池田	
615	森田	文化7.4.2	柵自来也談	横	演博	

616	森田	文化7.4.5	柵自来也談	横	演博・日大・池田	上記の日付のみ改刻
617	森田	文化7.5.11	太平記忠臣講釈	横	演博・国会・日大(2)	
618	森田	文化7.6.1	太平記忠臣講釈切狂言・世話料理八百屋献立	竪	国会・日大	
619	森田	文化7.6.24	男盛浪花姓・堀川のだん	竪	演博	
620	森田	文化7.7.5	男盛浪花姓・堀川のだん・綴合会稽錦	竪	演博・国会	
621	森田	文化7.9.13	今昔小栗栖文談・恋飛脚大和往来・三種笠慈愛旅路	横	演博・日大	
622	森田	文化8.2.23	台賀栄曾我・花姿詠千金	横	演博・東図・池田	
623	森田	文化8.3.5	台賀栄曾我後日・祇園祭礼信仰記・英執着獅子	横	演博・国会・東図・池田	
624	森田	文化8.3.7	英執着獅子	横	東図	
625	森田	文化8.3.21	祇園祭礼信仰記切狂言・花後日妓女風俗	竪	演博	
626	森田	文化8.4.6	仮名手本忠臣蔵・旅枕姿花娵	横	国会・日大(2)・東図	
627	森田	文化8.4.8	仮名手本忠臣蔵・旅枕姿花娵	横	演博	上記の日付のみ改刻
628	森田	文化8.5.10	仮名手本忠臣蔵新狂言	横	日大(2)	
629	森田	文化8.6.8	義経千本桜・関初音杉鳥	竪	演博・日大	
630	森田	文化8.8.4	漢人韓文手管始・蘆屋道満大内鑑・今昔同中富	横	演博(2)・国会・日大	
631	森田	文化8.8.16	蘆屋道満大内鑑第二番目・縫習帯屋信濃屋・名月桂川浪	竪	演博・国会	
632	森田	文化8.9.17	俊寛双面影・本朝廿四孝	横	演博(2)・日大・池田	
633	森田	文化8.10.6	本朝廿四孝・江戸紫流石男気・積恋雪関扉	横	演博(3)・日大・池田	
634	森田	文化9.4.14	友集重島原細記・伊勢音頭恋寝剣	横	演博・日大(2)	
635	森田	文化9.5.5	増補安達原・さる程重情一諷・花妻浮名井筒顔	横	演博(2)・日大	
636	森田	文化9.5.28	増補安達原・さる程重情一諷・新累世俗話	竪	演博・日大・池田	
637	森田	文化9.6.18	行平磯馴松・恋飛脚大和往来・形見忍夫摺・道行浮名の時付	竪	演博(2)・日大	
638	森田	文化9.7.15	行平磯馴松・恋飛脚大和往来・恋女房染分手綱・恋男調松風・道行浮名の時付	竪	日大・池田	
639	森田	文化9.8.20	其往昔恋江戸染・新媛房雛世話事・手向草霧の写絵	横	演博(2)・日大	

640	森田	文化9.9.9	扇矢数四拾七本・重陽謎の常磐津・新媛房雛世話事・手向草霧の写絵	横	演博(2)・日大	
641	森田	文化9.9.23	扇矢数四拾七本・重陽謎の常磐津・女鉢木・参らせ候根引曙	横	演博	
642	森田	文化10.1.17	例服曾我伊達染	横	演博・日大	
643	森田	文化10.3.5	浜真砂劇場絵本・お染久松色読販・心中翌の噂	横	演博(4)・日大	
644	森田	文化10.4.6	浜真砂劇場絵本後日・五大力恋緘	横	演博・日大	
645	森田	文化10.4.18	源平布引滝	竪	日大	
646	森田	文化10.5.7	曾我祭侠競	横	演博・日大	
647	森田	文化10.5.20	(仏舎利)	横	日大	
648	森田	文化10.6.17	尾上松緑洗濯話・閏茲姿八景	横	演博	
649	森田	文化10.6.20	尾上松緑洗濯話・閏茲姿八景	横	演博(2)・日大	上記の日付のみ改刻
650	森田	文化10.9.11	男一疋達引安売	横	演博・日大	
651	森田	文化10.閏11.7	(戻橋閏顔鏡)	横	日大(2)	
652	森田	文化11.1.10	双蝶仝仮粧曾我・其心春朧夜	横	演博・日大・東図	
653	森田	文化11.3.12	妹背山婦女庭訓・隅田川続俤・両顔月姿絵	竪	演博(2)・日大(2)	
654	森田	文化11.5.11	仮名手本忠臣蔵	横	演博(2)・日大・東図	
655	森田	文化11.6.16	恋女房染分手綱	竪	演博	
656	森田	文化11.6.29	恋女房染分手綱・伊達競阿国戯場	竪	演博	
657	河原崎	文化12.4.吉	(河原崎座再興・式三番叟)	横	演博・日大・東研	「鳥居清長筆」とあり
658	河原崎	文化12.5.11	時今摂握虎・杜若艶色紫	横	演博(2)・日大	
参考	河原崎	文化12.6.28	慙紅葉汗顔見勢・垂帽子不器用娘・寿二人猩々	横	演博(2)・東研・池田	顔見世番付形式。「絵師鳥居清峯筆」とあり

2　補遺

この補遺には、『鳥居清長作品総目録』の「版画作品目録」「絵本番付・絵本・枕絵・挿絵本作品目録」「肉筆画作品目録」の補遺を収載した。

掲載順・凡例は『総目録』に従った。「No.」「作品名」の他は補遺及び訂正部分のみ記載した。

新出の作品には「No.」の項に＊印を付した。新しい「No.」は最終「No.」の次から順に付した。ただし、同一揃物に属する新図は、枝番を追加した。

補遺項目のうち「所蔵(文献)」の新規の追加は公的機関に限定した。

版画作品目録

I 大判

No.	作品名	続絵	版元	年代(西暦)	所蔵(文献)	備考
1・20	当世遊里美人合　たち花				BER	
2・4	雛形若菜の初模様　松葉屋瀬川					1784。図録の浅野論文参照
2・5	雛形若菜の初模様　大文字屋内まいずみ				BER	
3・2	風俗東之錦　(町家の妻と娘と小僧)				ギリシャ国立アジア美術館	
4・2	風流三つの駒　(馬貝)				BER　礫川	
6・6	美南見十二候　(八月　月見の宴)				ヨハネスバーグ美術館(左)	
7・4	(官女)(清少納言)				ギリシャ国立アジア美術館	
7・5	(官女)(女三の宮)				ギリシャ国立アジア美術館	
11・5	子宝五節遊　(重陽)				BER	
13・3	子宝五節遊　(端午)				ギリシャ国立アジア美術館	
15	(大川端の夕涼)				HAM(左)	

18	（富士の巻狩り）				リートベルグ美術館	
22・a	（牛若丸と浄瑠璃姫）				ギリシャ国立アジア美術館（中・左）	
30	（仲の町の桜）				BER（左）	1785。次項の追記参照
32	（仲の町の牡丹）					1786。次項の追記参照
41	（洗濯と張り物）				ギリシャ国立アジア美術館（中）	
43	（初春の越後屋）				ヨハネスバーグ美術館（中）	
49	（吉原坎々楼遊興）				ギリシャ国立アジア美術館（左）	
55	（三代目瀬川菊之丞の小糸、山下万菊の賤機姫、三代目沢村宗十郎の大友常陸介、浄瑠璃二代目富本豊前太夫、脇語り富本斎宮太夫、三絃名見崎徳治）				HAM	
67	（三代目市川八百蔵の揚巻の助六、中村里好の揚巻、五代目市川団十郎の髭の意休、二代目市川門之助の白酒売、市川海老蔵の禿あげは、中村彦太郎の禿小ちょう）				ギリシャ国立アジア美術館（右）	
76	（三代目沢村宗十郎の頼朝、山下万菊の政子、中村里好の清滝）				HUAMをフリーア・アンド・サックラー美術館に変更	
82	（三代目沢村宗十郎の曾我五郎、三代目市川八百蔵の白菊の亡霊、五代目市川団十郎のでく六兵衛、浄瑠璃二代目富本豊前太夫、脇語り富本斎宮太夫、三絃名見崎徳治）				足立区立郷土博物館	
102	（三代目瀬川菊之丞の石橋）				リートベルグ美術館	
＊553	（三代目瀬川菊之丞と四代目岩井半四郎の回礼姿）		蔦屋重三郎	1791〜93	クリスティーズ・ニューヨーク1996.3	極印あり
109	（天狗を凧にして揚げる金太郎）				ギリシャ国立アジア美術館	
118	（熊に乗る金太郎）				ギリシャ国立アジア美術館	

121	(芝居ごっこの金太郎)					『白潮山荘浮世絵鑑賞』(1958)掲載品に1805年11月または12月の改印あり
130	(仔犬をひく金太郎)				リートベルグ美術館 ギリシャ国立アジア美術館	
135	(猪に乗る金太郎)				ヨハネスバーグ美術館	
144	(牛若丸と弁慶)				ギリシャ国立アジア美術館	
145	(旗本の妻と侍女二人、供の男)					「旗本」を「武家」に訂正
*149	(鳥居前の女たち)	2枚続			左図に相当する作品が『日本版画美術全集』第3巻及びクリスティーズ・ニューヨーク1997.11に載る	従来紹介されていたのは2枚続の右図。次項の追記参照。
150	(観梅の人々)					削除。勝川春潮の作品。
*554	(矢の根五郎)		江崎屋吉兵衛	1789〜93頃	『白潮山荘浮世絵鑑賞』(1958)	武者絵

Ⅱ 間判

*154・5	音曲手ことの遊　(舟に乗る芸者)				クリスティーズ・ニューヨーク2003.9	

Ⅲ 中判

159・3	風流十二気候　やよひ				ギリシャ国立アジア美術館	
*161・10	山王御祭礼　小網町三丁分　筒井筒踊やたい		西村屋与八	1780	リートベルグ美術館	
163・7	(唐子遊び)(碁でけんかする唐子たち)				ギリシャ国立アジア美術館	
*163・8	(唐子遊び)(子をとろ子とろの遊びをする唐子たち)				ギリシャ国立アジア美術館	
169・4	叉江花　(店前の若者と仲居)					副題を(水茶屋三人女)に訂正
178-7	青楼仁和嘉尽　京町一丁目　龍神はやし練りもの					副題を「京町一丁目　龍しんはやしねりもの」に訂正

182・5	美南見十二候　五月				ヨハネスバーグ美術館	
182・8	美南見十二候　八月				ギリシャ国立アジア美術館	
184・10	児女宝訓女今川　人の中言を企て…				ギリシャ国立アジア美術館	
186・2	誹風柳多留　腰帯を…				リートベルグ美術館	
187・4	教歌十首　（不作法）				ギリシャ国立アジア美術館	
188・2	江戸八橋　日本橋				ヨハネスバーグ美術館	
193	風流江都之□					作品名の□を削除
197・1	誹風柳多留　うつつにも…				HAM	
198・9	女風俗十寸鏡　（芸者）				ギリシャ国立アジア美術館	
200	江都七福神まいり					1793か。図録の浅野論文参照
202・4	東風俗略十種香　（旗本の娘と侍女）					「旗本」を「武家」に訂正
202・5	東風俗略十種香　（旗本の妻と侍女）					「旗本」を「武家」に訂正
202・6	東風俗略十種香　（遊女花扇の揚屋入り）					副題を「遊女道中」に訂正

Ⅳ 小判

＊237・7	戯童十二気候　三月(汐干狩)		西村屋与八		「2009新春版画目録」99頁	
239・4	風流略六玉川　高野				ギリシャ国立アジア美術館	2丁掛の左
239・5	風流略六玉川　千鳥				ギリシャ国立アジア美術館	2丁掛の右
244・5	六歌仙　在原業平					副題を「在原業平朝臣」に訂正
＊245・9	三ヶ津涼十景　両国				個人	
＊246・10	風俗十二通意　（品川遊所）				インディアナ大学附属美術館	

V 細判

257	細川勝元　(二代目)市川高麗蔵				HUAMをフリーア・アンド・サックラー美術館に変更	
*306	(二代目市川八百蔵の助六)(四代目)岩井半四郎のけいせいあげ巻	2枚続			所蔵不明(右)　ヨハネスバーグ美術館(左)	
*555	(二代目)瀬川菊之丞のけいせい舞鶴			1772	礫川	「振袖着更衣曾我」
*556	(二代目)山下金作の浅香のつぼね			1772	個人	「けいせい紅葉襠」
291	(二代目)坂田半五郎の小林の朝比奈				HUAMをフリーア・アンド・サックラー美術館に変更	
292	(三代目)瀬川菊之丞の傾城千代崎と瀬川雄次郎の喜瀬川				リートベルグ美術館	
315	(四代目松本幸四郎の菅丞相)					作品名を「(四代目)松本幸四郎のかんしやうじやう」に訂正
331	(三代目沢村宗十郎)					351と重複につき削除
344	(四代目)岩井半四郎のかさね				リートベルグ美術館	
349	(二代目坂東三津五郎の天念の万作狐、二代目市川門之助の二階堂信濃介、四代目岩井半四郎の大倉の小女郎狐)					作品名の「二代目坂東三津五郎…」の「二代目」をとる
*557	(二代目市川門之助の?)曾我五郎と御所五郎丸					『清長名作特別展』図録(1964)と同年の『日本浮世絵協会会報』8の溝口康麿氏の記事参照
376・1	(曾我祭の役者たち)(二代目嵐龍蔵と三代目市川高麗蔵)				東博(2)	
376・3	(曾我祭の役者たち)(五代目市川団十郎と四代目市川海老蔵)				東博(2)	
376・5	(曾我祭の役者たち)(二代目市川門之助と三代目瀬川菊之丞)				東博(2)	
377・c	(市川鰕蔵の暫)				BER	

382・2	風流七福神　（弁天）				リートベルグ美術館	
＊558	（本柳屋お藤）		岩戸屋源八か	1770〜72頃	礫川(2)	
＊559	（遊女と禿）			1775頃	ギリシャ国立アジア美術館	
＊560	うまいだあまいだぶし　おどけ哥念仏			1776〜77	個人	

Ⅵ 柱絵判

432	（舟に乗る藝者）				HUAMをフリーア・アンド・サックラー美術館に変更	
＊433-4	風流十二支　子			1782頃	Jacob Pins: The Japanese Pillar Prints, Hashira-e 1982	
516	（天神像）				千葉	錯誤につき削除
＊561	（猿曳と男女）			1782頃	Jacob Pins: The Japanese Pillar Prints, Hashira-e 1982	
＊562	（屋根舟の男女と岸を歩く女二人）			1783〜84頃	SCHRAUBSTADTER・COLL..1921N.Y.	

Ⅶ 摺物

No.	作品名	判型	版元	年代（西暦）	所蔵（文献）	備考
544	門松　猿若					「猿若」を「さるわか」に訂正
＊563	（藤間芳名開き披露公演摺物）	大奉書全紙判		1810	個人	42.5×55.7cm

絵本番付・絵本・枕絵・挿絵本作品目録

No.	作品名	種類・形式など	刊年	版元	所蔵（文献）	備考
＊32	壇浦兜軍記　糸ざくら	長唄（めりやす）正本1冊	安永7 1778	金井半兵衛・千本藤七	個人	表紙絵

肉筆画作品目録

No.	作品名	形状	署名・印章	制作年	所蔵	備考
19	「徒然草画巻」3巻のうち「酔歩の女と階上の士人」			享和3年頃	個人→東京藝術大学大学美術館	島内裕子「東京藝術大学大学美術館蔵「徒然草画巻」(全五十三図)の紹介と研究」(『放送大学研究年報』25号、2007)及び古田亮「鳥居清長の肉筆画を含む《徒然草画巻》(東洋画真蹟1262)について」(『東京藝術大学大学美術館年報[平成19年度]』2009)参照
*34	三代目市川八百蔵の助六・尾上松助の意休・中山富三郎の揚巻	紙本着色扇面	清長筆「清長」(朱文方郭内円印)	享和2年	個人(『肉筆浮世絵』1989.5ギャラリー内村、所載)	享和2年3月中村座「助六廓の江戸桜」に取材。辻番付目録118と同一図様

3　参考図

「版画作品目録」及びこの補遺に載るもので、平野千恵子『鳥居清長画集』に図版が掲載されていなく、『鳥居清長』展図録にも掲載しなかったものを掲載した。なるべく多くの図を載せるべく努力したが、掲載できなかったものも多いことをお断りしておきたい。なお、平野氏の「清長の版画総目録」になくても、『鳥居清長画集』に図版が掲載されているものもあり、それは当然省いた。

図版の番号は、「版画作品目録」及びこの補遺の番号である。（　）は平野番号である。ただし、平野番号は原則として編者の判断による。補遺に収録した「絵本番付・絵本・枕絵・挿絵本作品目録」の1点と「肉筆画作品目録」の1点はそれぞれ「絵本…」「肉筆…」と記した。

10-2（881）

9

2-10-a

35-b（848）

31-b（844）

83（741）

39（794）

139

134（1007）

121（993）

154-5

151-5（218）

149 の左（870 の左）

160-3（204）

159-6（196）

159-3（193）

161-10

161-7（237）

160-12

168-5

164-9

163-7

171-8

169-9

169-8（364）

174-7

174-6（1050）

173-3

178-7（1066）

178-1 の左（495 の左）

174-8

186-6（727）

185-11

179-3

195-3

193-4 の右（826 の右）

193-2 の左（824 の左）

202-7

198-9（915）

195-4

223（884）

216

207

230-2

229-8

228-4

232-7

232-6

231-8

237-4

236-2（253）

232-8

238-3

238-1（1071）

237-7

242-10

242-9

238-4

245-7

245-6（1068）

244-5（753）

246-10

245-9

245-8

249-9

249-4

247-3（1057）

255

250-2

249-10

315（63）

306 の左（54 の左）

303

257

335

321（71）

319

351

339

337

336

372

371

369

359（1064）

403

377-c

374

373

434-b

433-4

433-3

429（392）

426（324）

408（179）

517

515

514

513

484-5（528）

531

519-b

535（1065）

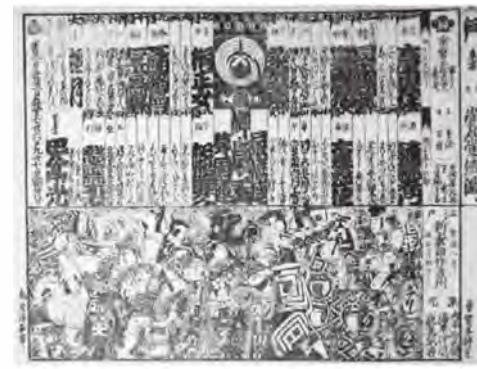
532-2

532-1

538

536

543（973）



539

553

552

548

562

561

560

554

絵本 32

4　拙稿「清長版画の編年について――美人風俗画を中心に」追記

「鳥居清長」展図録に掲載した、表題の論文で、二つだけ追記しておきたい。一つめは一三六頁と二七二頁に記した大判三枚続「仲の町の桜」と同「仲の町の牡丹」の制作年代についてである。両頁に天明五年秋版の吉原細見は刊行されていないと書いたが、それは間違いで、その後、天明五年秋版の吉原細見を見る機会を得た。その細見に「あふぎや内にほてる」の名前があった。禿名は「なみじ　ちどり」である。天明五年秋版に初めて名が載るということは、普通に考えると、にほてるは天明五年春版の細見の編集が終わった後、天明五年春頃以降に見世に出たということになる。したがって、一三六頁に記したように、「仲の町の桜」に描かれた三人の遊女が図に記された禿を伴って揃う可能性があるのは天明五年春だけということになる。にほてる付きの禿の一人が版画と細見で合わないのは、見世に出た当初は版画にあるように「なみじ　あふみ」であったが、天明五年秋版が編集される前にそのうちの「あふみ」が「ちどり」に変わったと考えれば矛盾しない。このような絵の場合、より重要なのは遊女名であり、禿名を間違えたということもありえる。

また、天明五年秋版の吉原細見に「玉屋内静」の名前は無かった。したがって、静の名が細見に登場するのは、天明六年春版からということになる。となると、「仲の町の牡丹」は天明六年の五月頃の牡丹の季節に刊行されたものとほぼ確定できるということになる。天明六年の大判の美人風俗画の基準作ができたという点ではありがたいことである。

平野千恵子氏は、「仲の町の桜」の制作年代を天明六年、「仲の町の牡丹」の制作年代を天明七年としているが、結果的に一年ずつずれることになったわけである。しかし、これをもって平野氏の年代推定を杜撰と考えることは正しくない。おそらく、平野氏はこの時期の吉原細見をすべて用意して遊女絵の年代考証はしていない。戦前にそれをすることは不可能に近かったからである。したがって、他の作品との様式の比較によって作画年代を決定したものと推定される。それが一年しかずれていなかったことをむしろ称賛すべきであろう。

二つめは、金太郎絵についてである。金太郎絵は毎年正月に売り出し、時にその歳の干支に因む動物を画中に入れたことが明らかになったが、金太郎絵の制作は、当然ながら、前年の暮ということになる。虎の玩具が描かれている「芝居ごっこの金太郎」について、楢崎宗重『白潮山荘浮世絵鑑賞』(内山晋コレクション、私家版。一九五八年)に掲載された図に、文化二(丑)年一一月あるいは一二月の改印が認められることは、文化二年の暮に制作され、翌年用に売り出した(販売は暮から行われたのかも

しれない)ことを証明するものであり、同様に、兎がいる「船頭姿の金太郎」に文化三(寅)年一〇月〜一二月の改印が認められることは、文化三年暮に制作され、翌年用に売り出されたことを証明するものである。「天狗の闘鶏を見る金太郎」には、津村屋三郎兵衛の月番行事印があるが、津村屋は、文化九年一一月に月番行事であったので、その月に改めを受けて制作、翌文化一〇年(酉年)用に売り出したものと考えられる。

5　おわりに

最後に、補遺を作成しての覚書を記しておきたい。

『総目録』の「版画作品目録」の「大判」で、平野氏の目録に新図様を追加しえたのは、№9の「源氏物語(浮舟)」と金太郎図2図の計3図のみであった。それをもってしても平野目録の秀逸さを再認識できるのであるが、補遺で、3図加えることができたのは幸であった。そのうちの№145「(鳥居前の女たち)」は平野氏の予想どおり続絵であったが、美人風俗画として見た場合、何ともしっくりこない奇妙な作品にみえる。左図の立っている女性の着衣の模様が藤であることなども参考に、この図を「鏡山」物の草履打のやつしと解することはできないであろうか。左図の二人を鶴ヶ岡八幡宮社前での岩藤と尾上、周囲の揚帽子姿の女性たちを御殿女中と解するのである(このことは吉田暎二氏が『日本版画美術全集』第3巻[講談社、一九六一年]で既に指摘している)。そうであれば、清長の美人風俗画としては、従来知られていなかった種類の作品として注目すべきものといえるであろう。

文化七年(一八一〇)の大型豪華摺物「藤間芳名開き摺物」の資料的価値も小さくない。№306の左図も新たに見出されたものであるが、岩井半四郎の姿形が№303の姿形とほとんど同一であるのも興味深い。またこれは、既に『総目録』に記載した作品であるが、№532「謡曲番組」の二図が確認されたことも、大きな意味を持つと思われる。二図のうち「しやつきやう」は15・9×11・0㎝、「夜うち曾我」は16・1×11・1㎝という大きさで、おそらくは小奉書八分の一、すなわち小判の二分の一の判型である。清長はもとより、同時代にこのような小型の揃物があったという報告に接していないからである。管見の範囲では、このサイズの版画は摺物を除くと歌川広重の最も小さい花鳥画しか知らない。もしかして、清長や同時代の絵師と版元は、このように小さく安価な作品を相当数制作していたのかもしれない。当時、「三文絵」という言葉があるが、それに相当するものであろうか。またこれも既に『総目録』に記載した作品であるが、№552の紅の包紙も珍しく、かつ重要なものである。これを含む貼込帖は少なくとも二種現存しており、改めて考察されるべき作品と考えられるので、これ以上は言及しない。

版画作品において、小判・細判といった小型のものや摺物は、今後もかなり新規に追加されると思われるが、大判・間判など比較的大きな判型のものの追加はごくわずかに止まるであろう。中判では、揃物で欠けている作が新たに見出されることはあっても、全く新しいシリーズが見つかる可能性は少ないと思う。「所蔵(文献)」を見ても気付くことであるが、大判・間判・中判・柱絵判は清長が版下を制作した作品の八割以上、場合によっては九割以上伝存し、見出されているように思われる。

黄表紙、緒番付、絵入版本も同様と思われるが、今回の補遺に収載した長唄(めりやす)正本『壇浦兜軍記　糸ざくら』の表紙絵に「清長画」と署名されているのには驚いた。当時、薄物正本と俗に言われる、数頁しかない浄瑠璃・長唄の正本の刊行は盛んで、歌舞伎の上演に合わせ、浮世絵師による役者絵の表紙を付けて刊行されていた。その表紙絵の多くは無款であるが、なかには署名入りのものもあり、歌麿や春朗(北斎)の表紙絵も確認されている。しかし、おそらくは鳥居派の作が最も多いと考えられる。清長の署名のある表紙絵の正本が今後多数確認されるとは思えないが、無署名の表紙絵のかなりのものが清長の版下である可能性が出てきたからである。明和後期から安永期の新進の清長が、細判の役者絵、中判・小判の美人風俗画、黄表紙、絵本番付

に作画し、師の清満が指揮する絵看板の作画や辻番付・顔見世番付の作画を補助し、その上、浄瑠璃・長唄正本の表紙絵を担当していたとすれば、当該期の清長の充実した作画活動を推測することが出来る。

肉筆画のうち「酔歩の女と階上の士人」の現在の所蔵先が判明したことも重要である。「徒然草画巻」三巻中の一図であり、同巻には鍬形蕙斎等の絵もある。詳細は島内裕子氏の論文と古田亮氏の研究報告を参照していただきたいが、今後の詳細な研究の俟たれる画巻である。扇面の助六図が確認されたことも大きい。上演に即して、おそらく注文により制作したものと推定されるが、清長が同種のものを相当数描いた可能性があるからである。捺された印章は、従来の作品には見出されなかったものであり、今後も検証されるべきものであろう。

天明期以降の清長が制作した絵画関係の作品で、歩留り率、つまり制作した作品のうち現在に伝わっているものの数が決定的に悪いのは肉筆画である。特に著しいのは絵看板である。現存する絵看板はわずかに一点のみ。想像をたくましくすれば、辻番付の図数に相当する、いや顔見世興行もあるからそれを上回る、年間百前後の数の絵看板を門弟と一緒に描いたものと推定したい。清長が、生涯に最も時間を費やし、最も多く制作したのは絵看板であろう。清長の絵師としての一生を展望するに当たって、そのことだけは忘れてはならないと思う。

この紀要において、『鳥居清長作品総目録』の作成を一応終えることになるが、より充実させる営為は今後も続けたいし、清長に関心のある諸氏にもそのことをお願いしたい。

Catalogue Raisonné of the Works of Torii Kiyonaga, An Addendum

Shugo Asano

In 2007, the Chiba City Museum of Art held a Torii Kiyonaga exhibition from April 28 – June 10. A catalogue of the exhibition was published at the time and on May 31, 2007, a *Catalogue Raisonné of Torii Kiyonaga* was published. In this *Research Journal* I have cited the *tsuji banzuke* (advance promotional flyers or street playbills for a kabuki theater) that were not included in the *Catalogue Raisonné* Here I note some additional information and ideas that have since come to light. Further, I have added reference illustrations of those images discussed in the Print Works Catalogue and in this addendum which were not previously reproduced in the Torii Kiyonaga exhibition catalogue or in Hirano Chieko's *Torii kiyonaga gashû* [Collected pictures of Torii Kiyonaga].

Further, I would like to add two additional notes to my paper, "The Chronology of Kiyonaga's Woodblock Prints – Focusing on beauty genre pictures," published in the Torii Kiyonaga exhibition catalogue. My first comment is regarding the date of production of two Ôban size triptychs, *Nakanocho no sakura* and *Nakanocho no botan*. In that paper I noted that the Tenmei 5 Autumn edition of the *Yoshiwara Saiken* had not yet been published, but since then I have had opportunity to view it. As a result, I can almost certainly determine that the *Nakanocho no botan* was published around the 5th month of Tenmei 6. Hirano Chieko has dated *Nakanocho no sakura* to Tenmei 6 and *Nakanocho no botan* to Tenmei 7, but this new research reveals that production dates of these two triptychs should be pushed back a year.

Secondly, I would like to note that *Kintarô-e* prints were sold each New Year, and the zodiac animal of each year was clearly worked into those prints. Thus, those Kintarô-e pictures were naturally produced at the end of the preceding year. The actual period of production is proved by the censor seals on each print.

Three *ôban* works can be added to the catalogue raisonné's addendum. Of these works, no. 145, *Torii mae no onnatachi*, is, as posited by Hirano, part of a multi-sheet work, while it was also a *Yatsushi* of Kagamiyama. It thus must be considered noteworthy as a type of Kiyonaga beauty genre picture not previously known. The reference material value of the Bunka 7 (1810) dated ôban size luxury *surimono* "announcement of the succession to Fujima Yoshi" is also considerable. Further the confirmation of two pictures in no. 532, *Noh Chant Program* is also greatly important, even though it is a work that was previously listed in the Catalogue Raisonné. Of the two pictures, *Shiyakkyo* is 15.9 × 11.0 cm, while *Youchisoga* is 16.1 × 11.1 cm in size. This means that they were 1/8 of *kobôsho*-sized piece of paper or half of a *koban*-sized piece of paper. The presence of this size work is important because up until now there has been no information that Kiyonaga, or indeed anyone at that time, was producing small-scale prints. The term "*sanmon-e*" was used during that period, and it may refer to this particular small-scale format. It is also important to note that there is a "Kiyonaga ga" signature on the cover-sheet picture of a *nagauta (meriyasu)* libretto *Dannoura-Kabutogunki, Ito*. At the time, there was a flourishing publication of *joruri* and *nagauta* libretti that consisted of only a few pages and were commonly referred to as *usumono shôhon*, literally thin libretti. When kabuki plays were presented, these libretti were published with actor prints by *ukiyo-e* artists attached as their front covers. The majority of these cover sheet pictures were anonymous, and the presence of this "Kiyonaga ga" signature is important because it indicates the possibility that a considerable number of these anonymous cover sheet pictures may have been based on drawings by Kiyonaga.1

(Translated by Martha J. McClintock)

高松次郎の「塾」――一九七一年度の活動――

藁科英也

はじめに

本稿では、高松次郎(一九三六―九八)が自宅アトリエで主宰した「塾」の初期の動向について、彼を中心とした紹介を行う。

高松の「塾」に関わる活動は一九七一年から七四年までとされているが、彼が直接運営に携わった期間は最初の一年間であるという。本稿では活動の助手を務めた田島廉仁氏(以下敬称略)より提供された一九七一年度における「塾」の活動記録を高松のメモのうち、公表が可能な内容を御遺族である高松靖子氏の了解を得て、筆者の責任において纏めた。なお、引用した高松のメモは、加筆訂正箇所をそのまま書き起こしたものと、そうでないものがある。

開講

「塾」の開講を告知した、二種類の活字資料を紹介する。

『美術手帖』一九七一年五月号の「告知板」欄に、次のような記事が掲載された(以下、本稿では引用文について太字で示す)。

「塾」開設　芸術全般、その他さまざまな事柄に関する思考と体験の場。(註1)

連絡先の住所は高松の自宅だが、「高松次郎方『塾』」となっている。雑誌などの公刊物に掲載された「塾」発足の告知は、現在これ以外確認されていない。

『美術手帖』の告知記事の他、詳しい内容を伝える次のような募集要項(活版印刷による)が作られている。

入塾募集要項

名称を「塾」とする。

当塾は、美術を基盤としながら芸術全般、さらには、われわれに関わるさまざまな事柄に対して思考と体験の場にすることを主旨とする。

担当者　高松次郎・藤枝晃雄

研究内容に応じて、随時特別講師を招聘する。

募集人員　第一部　二〇名

第二部　二〇名

資格　原則として一八才以上とする。

開講期間　一九七一年五月一一日(火)より七二年三月二九日(火)までとする。

(但し、八月を除く)

開講日時　第一部　毎週火曜日・午后二時〜五時
　　第二部　毎週火曜日・午后六時〜九時
申込期間　一九七一年四月一五日(木)までとする。
申込先　(略)
入塾決定　「塾」に関する説明を兼ての面談をしたのちに決定する。
面談日時　四月中の毎週火曜日(六日・一三日・二〇日・二七日)4回に渡って面談する。
　時間は、午后二時〜五時、六時〜九時とする。申込用紙に都合のよい日時を記入して下さい。
経費　入塾費　一五，〇〇〇円(入塾時)
　　月額　四，五〇〇円(毎月、最終火曜日)

(原資料の数字は全てアラビア数字・他は原文のまま)

記載された申込先住所は『美術手帖』に掲載されたものと同じで、表記が「高松次郎方―塾」とやや異なっている。この募集要項の末尾には、希望の時間帯、希望の面談日時、連絡先を記入して提出する「申込用紙」欄が設けられている。現在であれば、このような募集要項(のチラシ)などは、たとえば学校や画廊といった場所に置かれているが、田島廉仁(一九四八生)によればこの募集要項は画廊などには置かず、さきの『美術手帖』の記事を読んで問い合わせた人間に渡したものであるという。印刷された枚数は不明だが、およそ二〇〇枚程度とされる。また、「募集要項」中の開講期間の終わりを「七二年三月二九日(火)」としているが、一九七二年は閏年に当たり、三月二八日が火曜日である。

高松のメモの断片を基に推測すれば、彼がこのような活動について一九六九年頃から構想を持っていたことが判るが、直接の動機を示す手記のようなものは現在まで確認できていない。

それでも、高松が当時の美術教育とは異なったありよう、言い換えれば学校や画廊などといった既成の存在とは異なった「場」といったものを希求していた、と考えることは可能である。この傍証となり得る出来事を求めるとすれば、小林昭夫(一九二九―二〇〇〇)が一九六七年に発足させた「現代美術ベイシックゼミナール(略称・Bゼミ)」に高松が講師として参加していたことや(註2)、六〇年代末から七〇年代初頭にかけて多摩美術大学の学園紛争を契機に一部の教官たちによって行われた自主ゼミ(ナール)の存在を挙げることができる(註3)。また、高松は「塾」発足の半年ほど前、一九七〇年一〇月一六日から一八日の三日間、自宅アトリエを使用して、田島、川井調吉(生年不詳)と共に「アトリエ開放展」を行っている(註4)。

さきに掲げた「入塾募集要項」には藤枝晃雄(一九三六生)の名前が記載されている。当初は高松と藤枝ふたりの協同で「塾」の構想が進められていた。しかし、藤枝は開講前に退き、高松は「アトリエ開放展」に参加した田島を助手として「塾」の開講に当った。開講直前の五月九日、高松次郎は中原佑介(一九三一生)を自宅に訪ね、「塾」への協力を要請している。高松と田島は「塾」の内側にあたり、中原の位置づけは外部から「塾」に協力する、というものだった。「塾名簿」には「責任担当者」である高松と「助手・事務担当」である田島と共に、中原の名前が「相談役」として記載されている。

一九七一年五月一一日、「塾」は開講した。七月に活版印刷で作成された「塾名簿」には、面談を経て集まった参加者たち(以下、高松たちのメモに従い「塾生」とする)の名前が第一部・第二部共に二三人づつ、計四六人が記載されている。塾生は美術大学の学生に止まらず、一般の大学生や就職した者もいた。現在、彼らの年齢について詳細な調査を行っていないが、残された記録か

ら、その多くが二〇代ではなかったかと思われる(註5)。

それでは、「塾」は具体的にどのような活動を予定していたのか。

高松が当初構想していたカリキュラムについて、そのいくつかを彼のメモを基に列記する。

A　定期的なもの

①作品批評　参加者が自宅および教室で制作した作品

②教室制作　課題、材料を提供(ただし、小品で即興的なもの)

③読書　例えば老子や荘子など

B　不定期なもの

①講師の招聘　講義または参加者の作品批評

②見学会

③特別技術研究　作品制作上の技術について

④作品発表会　参加者全員で検討して決定する

⑤フリートーキング　随時

次に開講初日に関する高松のメモの一部を引用する(内容が変わる箇所はアステリスクで示した)。

memo on Mar 8th

五月一一日の講義(話し)

1. 田島氏の助手としての紹介
2. 藤枝氏の辞任の件 → 中原氏に関して
(辞任通告は五月六日)五月八日、最通告(ママ)
3. (2)にまつわる変更(塾生の辞退の問題)
自己紹介(塾生)
4. 塾の出発 発想と、その論理 塾生の決定の報告
5. カリキュラムの最検討(ママ)
6. 規則の件. 作るか / 作らないか
7. 運営(経営と教課)(ママ)
(なるべく塾生の要望は取り入れる. しかし最終的には高松がその責任において決定する)
経理公開の問題
8. 詳細にわたる問題
ⓐ読書　教室に於けるもの / 自宅に於けるもの ー レポート ①②
ⓑ開始時間. 特に第二部は六時半までは free time にすべきか.
ⓒその他 (記録の問題など)
保留の問題　中原佑介氏に関して
(責任外相談役. 及び. 非常勤講師)
9. 討論
×10. 塾生に対して質問事項 ― 今迄に最も興味の持てた書物
一〜三冊
×11. 質問事項 ― 今迄に最も興味の持てた芸術家
(現代日本を除く)

13. 少なくとも三〜四ヶ月はジャーナリズムへの資料提供はしない。
（シャッタ・アウト）

14. ←→ （塾報の発行）？
（三〜四ヶ月に一回）
（活動主体は塾生におくという案）

◎15. 記録は、個人を主体にしたものに限る。

16. 専用のノートを持参のこと。（手帖でもよい）

×17. 開始の時間。（遅刻せざるをえない人を考慮）

次回

18. レポート提出
四百字　原則として三〜五枚以内
Ⓐ 本人が最近最も興味を持った本、又は文章についての感想。
六月の第二週に提出
Ⓑ 現在今迄最も興味の持っている芸術家を一人選び、その芸術家について。（原則として現代日本を除く）
Ⓐ＋Ⓑ 状況と〜
Ⓒ 塾はどうあるべきか

⑲ 一八日は教室に於ける作品制作
二五日、合評会

⑳ 個人面談の日、五月中に一度。

㉑ 見学者の件、補欠の件　椅子使用の問題
保留

＊

規則↓作らない方向

塾としての公的組織
自然発生的

本質的にアナーキーである共同体

高松による連続的な読書
①荘子
②レオナルド・ダ・ビンチの手記。
③セザンヌの手紙
④新しい哲学（註6）

＊

◎個人面談の中で、全員に計つて決定すべき問題は、高松の方から、あるいは、その発言者・直接に。
全員に　ときには、その部のみ、ときには、一部二部共通に提案する。

＊

◎（必ずしも、）美術の文脈から語らない。↓教室に於ける作品制作。

＊

◎規則を作らないことに関して．

前近代的にならないための努力．

超近代的な方向への努力．

＊

五月一八日に予定すべきこと

◎全員に計るべき問題

見学者の問題（高松としては普通の日は．原則的に拒否）

二部に関して．一部の人が四人．二部にくることを希望している件

第に部に関して．遅刻せざるをえない人のために．

◎名簿の配布（共同討議）

＊

◎始めの二・三ヶ月は塾生の動向がつかみ難いと思うので、カリキュラムも断片的にならざるをえないだろう。

「塾」とは言うものの、高松の考えていた彼と塾生の関係は、教師と生徒という垂直的なありようよりも、より水平的な状態を考えていた（「自然発生的」「本質的にアナーキーである共同体」）ことが理解される。とは言え、年長者である高松が「塾」という場を参加者＝塾生たちに提供する以上、彼はカリキュラムの編成から金銭の具体的支出に至るまで、全体の責任者たるを免れない。彼自らもこの点に矛盾を感じていなかった（このことを、塾生たちがどのように考えていたかは別の問題である）。また、後述することになるが、「塾」の活動を外部（ジャーナリズム等）に向かって告知することも行わないことは、開講した早い時期に申し合わせられたものと思われる。

初日である五月一一日と翌週の一八日はいわばガイダンスであり、高松と塾生たちが揃った、いわば顔合せが主だった。高松は美術について、あるいは思想について語る一方、自宅アトリエを用いての活動であるため、雨の日以外は玄関から入らず、直接アトリエのテラスから出入りするように、ということまで塾生たちに伝えなければならなかった。

活動の記録

本項では、高松次郎と田島廉仁による記録を基に、各週の活動を判明した限り掲げる。特に講師名を記していないものは、全て高松が担当している。第一部と第二部のタイトルが同じものについては「（第一部・第二部共）」と記した（これはそれぞれの塾生たちを一緒にしたことを意味しない）。人名表記は、原則としてノートに記されているままとした。

一九七一年五月一一日（火）

（第一部・第二部共）ガイダンス

五月一八日（火）

（第一部・第二部共）ガイダンス

五月二五日（火）

（第一部・第二部共）講義「意味と無意味」講師・中原佑介

この講義はまず約一時間、中原の『ナンセンスの美学』（現代思潮社　一九六二）を高松が読み、その後約二時間、中原を囲んで討論を行った。

六月一日(火)
(第一部・第二部共)合評会
「合評会」は「塾」教室内部での制作とは異なり、塾生が自宅で制作した作品に関して、討論を行う(以下同)。
六月八日(火)
(第一部・第二部共)合評会
六月一五日(火)
(第一部・第二部共)「教室に於ける制作」および『老子』の読書
六月二二日(火)
(第一部)討論「前回の『教室に於ける制作』について」
(第二部)講義「カシミール・マーレビッチ論」講師・中原佑介
六月二九日(火)
(第一部)講義「記号について」講師・針生一郎
(第二部)討論「前々回の『教室に於ける制作』について」
七月三日(土)
草月ホールにて映画鑑賞「チェルシー・ガールズ」(監督・アンディ・ウォーホル　一九六六)(註7)
これは自由参加であり、塾生全員のうち約二三人が参加した。鑑賞会終了後に堀浩哉(一九四七生)をリポーターとした「自由会合」を渋谷の喫茶店で行う(参加者の人数および高松が参加したか否かについては不詳)。
七月六日(火)
(第一部・第二部共)講義「老子論」講師・斎藤義重
七月一三日(火)
(第一部)討論「制作過程と内容」および『老子』(第四〜七章)の読書
(第二部)討論「制作過程と内容」および『老子』(第七〜一〇章)の読書

この「制作過程と内容」に関する内容については、高松のメモによって後の項で紹介する。
七月二〇日(火)
(第一部)『老子』(第八・九章)の読書および討論「制作過程と内容」
(第二部)『老子』(第一一章)の読書および講義「李禹煥氏を囲んで」講師・李禹煥
七月二七日(火)
(第一部)『老子』(第一〇・一一章)の読書および講義「マーレビッチ論」講師・中原佑介
(第二部)『老子』(第一二〜一三章)の読書および講義「シュビッターズ論」講師・中原
八月三・一〇・一七日　夏期休講
八月二四日(火)
(第一部)『老子』(第一四・一五章)の読書および講義「シュビッターズ論」講師・中原佑介
この講義は、まず高松次郎が中原の『現代彫刻』(角川新書　一九六二)のシュビッタースの章を読むことから始まった。
(第二部)講義「ブランクージ論」講師・中原
八月三一日(火)
(第一部)合評会
(第二部)第一部の塾生も参加したフリートーキング
この日は、台風二三号のために当初の予定を変更したという。
九月七日(火)
(第一部)合評会および討論「塾の運営について」
(第二部)討論「塾の運営について」

この日の討論の主な議題は、「見学者について」「個人面談(その方法)」「講師招聘」「課外活動」「『老子』以外の読書」。

九月一四日(火)

(第一部)講義「ブランクージ論」講師・中原佑介

(第二部)合評会

以後、中原はヨーロッパに出かけ、しばらく「塾」講師を務めていない。

九月二一日(火)

(第一部)合評会

(第二部)合評会および高松による報告「制作過程と内容」

九月二八日(火)

(第一部)合評会

この日、第二部の活動は不明。

一〇月五日(火)

(第一部・第二部共)講義「松澤宥氏を囲んで　観念合成法」講師・松澤宥

一〇月一二日(火)

(第一部)『老子』(第二二・二五・二七・三二・三五・三七章)の読書

(第二部)「教室に於ける制作——共同制作」

一〇月一九日(火)

(第一部)合評会および「教室に於ける制作」

(第二部)『老子』の読書

一〇月二六日(火)

(第一部)『老子』(第八一章まで)の読書

(第二部)講義「記号論」講師・針生一郎

一一月二日(火)

(第一部)「教室に於ける制作——共同制作」および「合同合評会(仮称)」の打ち合わせ

(第二部)『老子』の読書および「合同合評会(仮称)」の打ち合わせ

第一部の「教室に於ける制作——共同制作」内容は前月一二日に第二部が行ったものと同じ。

「合同合評会」は、一九七二年三月に「塾」(高松アトリエ)を中心に行われた大規模な合評会(後の項で紹介する)。

一一月九日(火)

(第一部・第二部共)講義「老子・その人間像」講師・山田統

一一月一六日(火)

(第一部・第二部共)講義「中原佑介氏を囲んで」講師・中原佑介

今日のソヴィエトおよびヨーロッパ美術の報告および数学論。

一一月二三日(火・祝)

(第一部・第二部共)フリートーキング「発表の方法について」

この日の内容は、前掲の「合同発表会(仮称)」に関する意義や目的に関するフリートーキング(高松はこの語彙を「討論」とやや分けて用いているように思われる)であり、共に高松の他に塾生が各一名司会を務めた。

一一月三〇日(火)

(第一部・第二部共)合評会および討論「塾・合同合評会について」

一二月七日(火)

(第一部・第二部共)「合同合評会(仮称)」の打ち合わせおよび合評会および討論「塾のカリキュラムについて」

一二月一四日(火)

(第一部)パネル・ディスカッション「不在性について」および「新聞を読んで」

(第二部)パネル・ディスカッション「不在性について」

この日は、中原の講義を予定していたが、彼が急用のため内容を変更した。

「不在性について」は高松がレポーターとなって彼の「世界拡大計画　第一章」(註8)について語り、「新聞を読んで」は田島がインド・パキスタン紛争について報告した。

一二月二一日(火)

(第一部)塾生によるパネル・ディスカッションおよび講義「現代数学講義」講師・中原佑介

(第二部)討論「合同合評会(仮称)について」および講義「現代数学講義」講師・中原佑介

第一部のパネル・ディスカッションと第二部の討議はテーマが異なっていたと考えられる。中原の講義は遠山啓『現代数学対話』(岩波新書　一九六七)をテキストとした集合論の講義。

一二月二六日(日)

(第二部)合評会および「教室に於ける制作」、「自由討論」

この日は第二部のみの特別講座だった(理由は不明)。

一二月二八日および一九七二年一月四日　冬期休講

一月一一日(火)

(第一部・第二部共)「教室に於ける制作」

一月一六日(日)

「合同合評会(仮称)のための全体打ち合わせ会議」

この会議は、第一部と第二部の塾生が合同で行った。期間を三日間とすることを決定。

一月一八日(火)

(第一部・第二部共)講義「現代数学講義(第二回)」講師・中原佑介

一月二三日(日)

「合同合評会(仮称)のための全体打ち合わせ会議」

この会議は、第一部と第二部の塾生が合同で行った。場所と日時、名称を「仮称合評会」とすること、主旨、対外的なアピールの可否などを決定。

一月二五日(火)

一月三〇日(日)

この両日は、高松のメモでは「塾生パネラーによる討論」(二五日)、「一部の特別授業」(三〇日)とのみ記されており、詳細は不明。

二月一日(火)

(第一部・第二部共?)講義「ぼくのセザンヌ論」

この他、「仮称合評会」の決定事項が報告される。

二月六日(日)

「仮称合評会のための全体打ち合わせ会議」

この会議は、第一部と第二部の塾生が合同で行った。カリキュラムとしての「仮称合評会」のあり方と内容、責任が問われた場合の対応が話し合われた。

二月八日(火)

(第一部・第二部共?)講義「現代数学講義(第三回)」講師・中原佑介

二月一三日(日)

(第一部)「教室に於ける制作」および「自由討論」

この日は第一部のみの特別講座だった(理由は不明)。

二月一五日(火)

(第一部)討論「『作家の言葉』による討論」

高松のメモにはアーサー・エディントン(一八八二―一九四四)のものと推測される言葉が記されているが、エディントンは天体物理学者。

この日、第二部の活動は不明。

二月二二日(火)

(第一部)講義「位相数学」高松による中原氏の追補」、討論「『作家の言葉』に

よる討論」および塾生によるパネル・ディスカッション

（第二部）「ル・クレジオの読書」

第二部に使用されたテキストは不明。

二月二九日（火）

（第一部・第二部共？）講義「寺山修司氏を囲んで」講師・寺山修司

三月五日（日）

「仮称合評会のための全体打ち合わせ会議」

この会議は参加者のみであったと考えられる。

三月七日（火）

（第一部）「ル・クレジオの読書」および「仮称合評会の連絡」

（第二部）塾生によるパネル・ディスカッション

第一部に使用されたテキストは高山鉄男（訳）『発熱』（新潮社　一九七〇）所載の「ボーモンが痛みを知った日」であると思われる（二月二二日第二部も同じテキストか）。

この日の活動について、高松のメモには「二月七日」の日付が記されているが、前後から判断して三月とした。

三月一四日（木）

（第一部・第二部共）「仮称合評会準備を主とした自由講座」

三月一六・一七・一八日（木～土）

「仮称合評会」

高松のアトリエをはじめ、武蔵野市公会堂や井の頭文化公園内などで開催された。

三月二一日（火）

（第一部）塾生によるパネル・ディスカッション

（第二部）講義「現代音楽論」講師・秋山邦晴

三月二八日（火）

（第一部・第二部共）「第一期最終講座」

約一年間の活動を通覧すると、さきに引用した高松のカリキュラム構想は、ある程度こなされている、という印象を受ける。

「定期的」な活動である合評会は、参加者全員が提出したわけではなく、週に三～五人の塾生の作品を批評し合うもので、塾生一人当たり、二、三ヶ月に一回というペースだったと推測される。高松による『老子』講読については、その全体像や概要は不明であるが、「教室に於ける制作」については彼が示した課題が残されている（後出）。

「不定期」なもの、特に外部からの講師招聘は「塾」の相談役を務めた中原佑介を除けば美術評論家の針生一郎（一九二五生）、美術家の斎藤義重（一九〇四―二〇〇一）、松澤宥（一九二二―二〇〇六）、李禹煥（一九三六生）、演劇の寺山修司（一九三六―八三）、音楽評論の秋山邦晴（一九二九―九六）、中国思想史家の山田統（一九〇六生）であり、山田以外はいわゆる「現代美術」に（直接・間接問わず）関わる人物たちだった（註9）。当初は高松自身も文学、演劇、音楽、建築など幅広い外部講師の招聘を考え、また塾生の側も多彩な講師の顔ぶれを期待していた（註10）。その意味において、外部講師の招聘は不活発なものと評されるかも知れない。しかしながら、「塾」は大学などとは異なり週一度、しかもわずかな時間での活動であり、定期的な活動の計画に影響が及ぶことは避けなければならなかったことを考えれば、外部講師の招聘が縮小しても仕方がなかっただろう。

高松が記したメモの内容を追う限りでは、斎藤と李の講義は高松が講読を重ねた『老子』理解を補うものとして進められており（註11）、松澤の講義も中原の現代数学、針生の記号論と様相を異にしながらも、思考の方法論という意味で

は共通する。また、美術と直接関わる講義を見ても、活動後半に行われた高松のセザンヌをはじめ、中原のマレーヴィッチ、ブランクーシ、シュビッタースなどの作家論は、いわば二〇世紀美術入門という趣が強い。これに対し、「いま・ここ」で起こっていることを塾生に対してジャーナリスティックに解説し、理解させようとするようなカリキュラムは設けられていない。高松は、『老子』の講読が象徴するように、古典的な思想あるいは基礎的な思考といったものを重視していたと推測することが可能である。

なお本項のしめくくりとして、ここに掲げた日にち以外にも、高松は助手である田島をはじめ、中原や他の講師たちと数多く打ち合わせを重ねていることを強調しておきたい。

「制作過程と内容」

それでは、高松は塾生たちにどのような課題を与え、何を語っていたか。

一九七一年六月一五・二二・二九日の三週にわたって行われた「教室に於ける制作」において高松は塾生たちに対して次の課題を与えている。

問1．提出された物体(これは発泡スチロール-引用者註)に対して、文字又は文章で表現して下さい。

問2．提出された同じ物体に対して、指定の紙の上に、文字または文章以外で表現して下さい。

問1・問2の両方の問題を共に未完成でも六時より八時三〇分(二時より四時三〇分)までに完了して下さい。

㊟提出された物体に変化を与えないこと。

「教室に於ける制作」は、各塾生たちの作品を高松や塾生同士が見、討論する、という形式だった。高松のノートには、この課題の意図と思われるメモが、続けて記されている。

見るということの、主体と客体との問題

この課題から、約半年後の一九七二年一月一一日に出された課題。

教室に於ける制作(文章表現)―(言語表現)

「文字または文章を書かないでください。」

○この黒板に書かれている右の一文に関連して、文字または文章を指定された用紙に書いて下さい。

このふたつの課題は、この時期の高松の作品《石と数字》(一九六九)や《日本語の文字》(一九七〇)に見られる、世界とそれを記述しようとする人間の関係を問おうとする姿勢と直に結びついている。

高松が「塾」の準備のために記したメモの中で、最も纏まりがある内容が、一九七一年七月一三・二〇日と九月二一日に行われた討論(あるいは報告)「制作過程と内容」についてである。これは、塾生たちと討論するための、いわば「たたき台」として彼が記した草稿であり、その内容は彼が分析した「作品」制作とその営為=積み重ねの原理についてである。

六月三〇日、最初の構想が彼のノートに現れている。

問題点

①日常とは何かという問いと抽象性が重要.

②制度は日常性をわい小化し. プロセスを短絡させる.

③他人が見る場合は上からの推測.

④感性の感性は存在しない！それは即自存在的である。（そのために、プロセスには理性の介入する必要がある）

⑤理性はつねに、感性の統括をする。

理性の理性だけが、理性を統括する。

何が自分にとって、より面白いことなのかというような

何がこの場合より正当であるのかというような

⑥理性の理性が哲学.（「新しい哲学」参照）

⑦技術の技術が教育であるべきである。（自己教育を含む）（理性の働くことが多い）

⑧感性的指向は. つねに物体（実在）に関する指向性となる。

引き続き、七月一九日にも記されている。

制作過程と内容

高松のメモ'71—7—19

0 一般的な日常的世界

内容…すべての経験.（事物との触れあい.

知覚. 思考. 想像. 情報経験. 自己の制作経験.

…その他）

性格…倦怠的混在

「形式」から具体的な制作が問題となる.

1 ある出発の基盤

内容…ある時点での興味に対する積極性.

混在の中の発生. 立ち止まるということ.

性格…感性的.（綜合的作用）

註→0と1の境界は. 時間的でなく.

空間的であるが. 空間的境界もまた. 流動的. 連続的である。

受動性と. 能動性の境界線上.

2 その興味の強化のための意識化,（ある出発）

内容…1の検討、及び、行動(作業)に意義があるか否かの検討は、具体的には、自分にとって、何が最も面白いかというようなことの検討、

性格…理性的(抽象化作業)
やや特殊な日常性の発生、
(虚構性)?
反省的

3 1と2に関する試行

内容…(具体的作業術動)、たとえば、スケッチや模型、ときには、空想的作業、のときもある。

性格…賭け、具体性、
やや特殊な日常性、(虚構性)?
(以下同じ)

4 3に関する感性的検証

内容…2の具体性抽象性と、3の具体性との内容的統綜括

性格…感性的(綜合作用)
賭けの回答、
やや特殊な日常性、(虚構性)?

註→2 3 4は、時間的順序があるとは限らない。つまり同時的にも存在しえる。空間的境界があるとしても、流動的、連続的である

2 4の意識化を通しての1 2 3の再検討

内容…2の再検討、理性のためのの理性＝哲学(的)
3の再検討、技術のためのに関する技術検討。思考。への思考。
の発生＝自己教育の基盤、……これらを綜括的に意識することが教育、の基盤、
4の(検証結果の)意識化、それを通しての1の再検討、

それに関連する問題を、できる限り広範囲に考えるまた、その問題の限界を考える。

次の作業に意味があるか否かの検討、

性格…抽象化作業、(理性、具体性、

感性の綜括）超越的性格．
反省的性格．（0にもどる　初心にかえる）
非日常的．

3　あらたなる試行

内容性格…3との相違は．避けようとしても不可能な．経験の量によって決定される。3の技術的(註12)具体化作業．賭け。技術に関する技術的実験を含む。

内容…3と現象的には同じ性格．具体的な内容的性格の相違のみが問題．
　具体化作業
　非日常的．

4　3に関する検証感性的検証．

内容…2の抽象性と．3の具体性との内容的綜括．
性格…感性的（綜合作用）
　賭けへの回答．

　感性の感性は存在するか．
（多分存在しないであろう。）

註→2 3 4は．時間的順序があるとは限らない。同時にも存在する。しえる。空間的境界があっても．流動的．連続的である

2′〜4′　以後について

以下、2 3 4 2′……と続きえる。
それは．展開．又は停止の必要性（必然性）が発生するまで．くりかえされる．もちろん．4で終ることもありえるが．

（最低限．4までは必要条件となるべきであろう。）

停止　これらの一連の経過が停止され終了したと認めえるとき．それは．
日常　一般的日常性となる。
4′＝0
（それ以前とは変容してはいるが．）

このメモの中に「教育の基盤」という語句があることから、このメモ全体を「塾」における活動、諸カリキュラムの連関として読むことも可能だろう。高松にとっては作品の制作も「塾」も、等価だったことになる。だからこそ、彼

自らの制作上の関心を「塾」に持ち込むことが可能となった。その意味では、塾生たちは高松次郎という芸術家が、最も直近に抱えていた問題に触れていたことになる。

高松は一九六〇年代末から七〇年代にかけて、階梯を踏まえた作品制作を行うように努めていた。その連関において彼のこのメモは、その制作原理の根拠＝方法論でもある。重要な点は、「私」たる主体が対象となる客体（これは、「もの」や「物質」から「作品」に至るまで、様々な段階がある）に加える操作の手順（手続）に従って記述されてはいるが、主体が自らに対して懐疑を抱く可能性について、ほとんど顧みられていないことである。それにかかわる唯一の語彙が「賭け」であるが、このシステムを検討する限り、彼の記す「賭け」は目的地までの交通手段を選ぶことと大差はなく、主体のゆらぎ、不確定さまで織り込まれていると評価することはできない。彼は「再検討」や「検証」という作業を組み込んではいるが、それは単なるフィードバックの機能しか与えられていない。これは主体を客体として見つめようとするまなざしの欠如であり、同時に他者の存在が顧慮されていないことでもある。

この問題は、塾生たちが集団で行うことを目的に高松が提示した課題にも現れている。

一九七一年一〇月一二日と一一月二日に行った「教室に於ける制作――共同制作」の課題。

教室に於ける作品制作
題名「共同制作」

ルール（一）（大項目）
複数の人が、一つの対象（課題）に対して、各々一定の持ち時間の中で、順に制作を受け持つこと。回数を重ねてもよいが、同じ順番で、各々が同じ回数制作を受け持つこと。

ルール（二）（詳細）
指定された紙面の中に、指定された用紙を一枚一枚選び、三分以内に、任意の位置に、指定された接着剤で貼り付けること。

注（1）
指定された紙面、及び用紙は、〔ルール（二）（詳細）〕以外の加工を加えてはならない。

注（2）
指定された紙面の外側にはみ出して、あるいは、それ以外の位置に、用紙を貼ってはならない。

注（3）
指定された以外の物体を、指定された紙面に貼ることはできない。また、指定された以外の物体に関しては、当制作とみなすことはできない。

注（4）
指定された用紙の接着面、及び位置以外に、接着剤を付着させてはならない。

注（5）
制作参加者は、以上のことを守ったうえで、必ず実行しなければならない。

参加者たちはこの課題を示された際、お互いが話し合ったと考えられるが、これは会話をしなくとも可能だろう。いわば、自らの行為で起こった予測不可能な事態（他の参加者たちの反応）に対し、参加者がどのように反応を重ねるか、というゲームである。

「制作過程と内容」の内容に立ち戻れば、既述のような問題を抱えながらも、最初の項目に記されている「「形式」から具体的な制作が問題となる。」という一節は、一九六三年に高松が記した「〝不在体〟のために」(註13)で彼が規定した絵画という「もの」の「物質的実在」を明らかに踏まえているし、「4″＝0′」の無限反復は、「『不在体』のために」を含む彼の六〇年代に積み重ねた思索「世界拡大計画」のエッセンスである。

高島直之は高松の「方法論」の意義について次のように記している。

…高松が生涯をかけて表現してきたこととは、実在性からどこまで遠くへ行けるかという実験であり、その仕事に完成はなく、けっして到達がないという点です。重要なことは不在のもつ、より純粋な緊張感をいかに延命させていくかという「方法論」こそが、高松の手中に残ったということです。(註14)

「仮称合評会」

前項で記したとおり、高松次郎のメモ「制作過程と内容」は他者、さらには対象と向き合う姿勢を考慮しているとは言い難く、モノローグ的な構造である。

その一方で、高松は「塾」においてダイアローグを重視していたこともまた事実である。その代表的なカリキュラムとして一九七一年六月一日から絶えず続けられた合評会がある。ただし、彼のメモを読む限り、塾生たちが自宅で制作した作品を「塾」に持ち込み、批評し合うという行為と、「制作過程と内容」に記されたシステムをどのように統合するか、といった思索は行われていない。

通常、毎回の合評会では塾生全員の作品を批評することはできず、高松は「塾」の活動が本格的になった一九七一年夏ごろから自宅アトリエおよびその周辺の屋内外で第一部と第二部合同の合評会を行う構想があったと推測される(註15)。この構想が、高松と田島廉仁との間の具体的な打ち合わせが行われたのは九月二〇日のことで、この段階では翌月の日曜日である一〇月二四日か一一月中に開催する予定だったが、結局七二年三月一六日から一八日にかけて、「仮称合評会」という名称のもとに実施された。

この合評会のために塾生たちが制作した謄写版刷りの『仮称合評会ガイドブック』によれば、三月一四日の時点で高松と田島を含めた四一人の参加が予定されており、すでに作品とその発表場所が決まっている参加者は次の通りである(発表場所が複数にわたった参加者もおり、左記は延べ人数。また場所の名は当時の呼称)。

高松自宅アトリエ　二〇人
井の頭公園(公園駐車場、公園附近の歩道、中ノ島池)　三人
武蔵野市公会堂　一一人
東京都立教育研究所三鷹分室山本有三青少年文庫　一人

高松は自宅アトリエ、井の頭公園、武蔵野市公会堂でそれぞれ《複合体1》、《複合体2》、《複合体3》を制作している。これが、彼が「複合体」という作品名を用いた最初の作例となった。「仮称合評会」で発表されたと考えられる「複合体」は、杭や立っている丸太(木製の電柱が途中から切り取られたものと思われる)などの切り口に砂を円錐状に盛り上げたものである。彼はガイドブックに井の頭公園付近での《複合体2》は「一七日午後一時」から設置することを予告している(これは、仮設的性格の強い作品に備わるイヴェント性につ

いて、高松が考慮していた証左となる）。

「仮称合評会」は「塾」の活動であり、活動を対外的には告知しないという原則に従うとすれば「仮称合評会」に各自が提出した作品も非公開となるが、自宅アトリエ以外、公共的な空間を用いての作品設置に関してこの原則を当てはめることは出来ない。結果としてこの問題については、ごく限られた関係者には通知する、という曖昧な決着が図られた。高松の「複合体」も本来ならば非公開のはずである。しかし高松本人は「仮称合評会」に発表した作品は画廊などで発表する作品との間に違いがあるという認識は持っておらず、後に『美術手帖』一九七三年一月増刊号に掲載したいという峯村敏明（一九三六生）の要請によって「仮称合評会」で制作した「複合体」の写真資料を提出している[註16]。

高松の「複合体」の写真掲載をめぐっては、その後塾生内部から「塾」の原則に外れるのではないか、という疑義が出され、高松本人が塾生たちに対して事情を説明する結果となった。これは「塾」の活動をめぐり、高松と塾生たちとの間にずれが生じた一例だが、「仮称合評会」が当初予定していた期日から大幅にずれ込んだ理由もここにある。高松が開催そのものを塾生たちと共に運営することを目指したため、合同で合評会を行うことの意義付けや開催そのものの可否などをめぐって各自の認識と主張のずれが露わとなり、討論に多くの時間が費やされたためである。

そのさなか、高松は「塾」について自らの定義付けを行っている。

一九七一年一二月一〇日の．メモ．

当「塾」には、現実指向も、ユートピア指向も存在しえないだろう。塾は現実の中に形成されるべき、新たに付け加えられた、小さな現実そのものなのである。現実指向とユートピア指向が混線し、またいずれかに対しての仮説的な場としても存在しえない。教育が、一方的なコミュニケイションの成立を条件としているなら、塾は、そこに参加している人のすべてが、コミュニケイションの発信と受信の原点であるだろう。

また複数の人たちが理想的な関係をもつべき共同体としての単純化しえる論理を存在させるには、何らの前提をももってはいない。塾の構成方法は、論理の単純化よりも、その複雑化にしか加担してはいない。

塾は、厳密な意味で教育機関にはならないであろう。それはあくまでもコミュニケイションの場であり、最大限、自己教育の場にすぎない。

しかし、共同体的の可能性は存在しえる。それは、あくまで混線したコミュニケイションと、永遠に否定をくりかえすユートピア指向という状態を通してしか存在しえない。

塾は、特定の何ものかには向かない。また逃避することもない。

結果として、「仮称合評会」は「塾」の一九七一年度の活動をしめくくる大きなカリキュラムとなった。ただし実施に至るまでの経緯などから、高松や塾生たちはこれを「卒業制作」的なものと考えてはいなかった。

一九七二年三月二八日、最終講座が行われた。

この際の高松の挨拶文を掲げる。

塾一期の終了にあたり．

塾生の皆様に．

事務担当者　高松次郎　より

＊

塾一期　塾生の皆様

昨年の五月十一日より、本日、三月二十八日をもって終わる当塾のカリキュラムを完了しえたことは、相談役、中原佑介氏、及び、助手兼事務担当者、田島廉仁氏の多大なる誠意と尽力によるばかりではなく、塾生皆様方の強固なる意志と、絶大なる努力なくしてありえなかったことはいうまでもありません。

なかでも、この十一ヶ月の間に、個人の問題を越えて、当塾のより全体に関わる仕事で努力をおしまれなかった方々が、この期間の塾を支えてきた一面には言葉に尽せないものがあると思われ、特別に責任担当者から感謝の意を表わすべきかもしれません。しかしながら、眼に見えないような部分に於いて、また、責任担当者には感知しえないところで、一人一人の熱意にあふれた力強い努力がなされたことは、想像に難くなく、それに対して考え及ぶとき、もはや個別的な感謝の表明は避け、皆様方全員に対してのみ言葉を述べるべきであろうと考えます。

皆様、どうも有難うございました。

昨年の五月十一日から、本日、三月二十八日までの当塾の、カリキュラムを主体とした経過を、塾一期と呼びたいと思いますが、当然、それに関するさまざまな批評が存在する筈であり、責任担当者としても、塾生の方々からの多くの意見を聞きながら、今後も塾に関する思考を続けていきたいと思っております。

というのも、当塾は、本日ですべてが終ったわけではないと考えるからであります。今から塾二期ともいうべき、今後もたれるカリキュラムの作成を考える必要があると思われますし、また、それ以外にも形式を越えて存在する塾の一面を、今後に於いても無視しえないものとして思慮するがためであります。

今、ここで責任担当者の一人の意向をいうべきではないと思いますが、単なる希望として述べるとすれば、塾二期は、おそくとも来年五月までには始めたいと思っております。それも、前に触れましたように、塾一期の批評をふまえ、まず第一に一期関係者の意向をよりよいと思われる方向で集約させながら、新しい可能性の追求を基礎にして遂行していきたいと思っております。

塾二期に参加を希望される方はいうに及ばず、一期のみで当塾を離れられる方々も、さきにいいましたように、塾が形式を越えても存在している部分を考えるとき、決してこれからの塾とも無関係であると考えるべきではないように思われます。従って、今後いずれの方向を選ばれるにせよ、責任担当者としては、いまここで、皆様方全員に対して今後ともよろしくお願いいたします、ということを申し述べたいと思います。

一九七二年三月二八日

塾　責任担当者　高松次郎

おわりに

一九七二年四月一六日、日曜日に第一部と第二部合同(自由参加)による会合が持たれ、塾の今後が話し合われた。「募集要項」に記されていた「開講期間」以後も継続した活動を希望する声は、七一年の夏ごろからすでに一部の塾生から寄せられていたからである。

その後、「塾」は塾生たちの自主運営に委ねられ、高松次郎と田島廉仁は実質的な活動からは退いた。一九七三年七月には「塾二期生」募集の原案が纏められ、高松が「責任担当者」、中原佑介が「相談役・講師」として名を連ねているが、田島の名前はない。

註：

1：「告知板」『美術手帖』第三四二号，一九七一年五月　三四頁
2：「再録文献　高松次郎　演習ゼミ」，藁科「文献解題」『高松次郎――一九七〇年代の立体を中心に』千葉市美術館　二〇〇〇年　一一六―一一八，一二二頁
3：例えば、多摩美術大学では一九六八年以降の学生運動の中で、学生と教員の共催による「自主ゼミ」が組織的に開催されていた。
4：「今月の焦点　ワイド・アングル　高松次郎の「アトリエ開放展」」『美術手帖』第三三五号　一九七〇年一二月　一三九頁
　田島廉仁は一九六九年に多摩美術大学油画科に入学した後、高松次郎を自宅に訪ねたという。以後、七四年まで高松次郎の助手として《万物の砕き》（一九七〇―八〇）などの制作を手伝っていた。田島の記憶によれば川井調吉はアメリカで美術を学び、当時帰国中だった人物とのことだが、不詳。
　また、自宅での作品発表については、次のような高松の自筆文献がある。
高松次郎「今月の焦点　ワイド・アングル　日常空間での表現とは？　彦坂尚嘉の〝自宅〟個展」『美術手帖』第三四四号　一九七一年七月　二二頁
5：高松（および田島）の記録には五〇人ちかい面接（希望者）のメモがある。このメモは「塾名簿」と一部一致しておらず、高松は最低でも六〇～七〇人を面接したものと思われる。
6：これは他のメモとの比較から、次の書籍名であると思われる。
山下正男『新しい哲学　前科学時代の哲学から科学時代の哲学へ』培風館　一九六七年
7：「チェルシー・ガールズ」はフィルムアート社主催による「フィルムアート・シネマテーク」の一環として、左記の通り上映された。
七月三日（土）　草月会館ホール　午後二時三〇分、午後六時三〇分
七月五日（月）　紀伊国屋ホール　午後一時
　なお、「草月シネマテーク」と題された映画上映会は、一九七一年三月で終了している。
　本項のデータは、常見美智枝氏（財団法人草月会）の御教示による。
8：「世界拡大計画」は一九六四年以降、高松次郎が折にふれて発表した文章である。当日、高松が取り上げたテクストが具体的に何であったかは現在不明である。
　一九七一年当時、書店でも比較的入手しやすかった高松の「世界拡大計画」に関わるテクストは、羽仁進・編『戦後日本思想大系　一二　美の思想』（筑摩書房　一九六九）所載の「世界拡大計画―不在性についての試論（概説）」（初出『デザイン批評』第三号　一九六七年六月）だった。この「世界拡大計画」は、一～七までの章に分けられている。
　現在、高松が公表した「世界拡大計画」の全体については左記の著作集に纏められている。
高松次郎（編集委員　高島直之・真武真喜子）『世界拡大計画』水声社　二〇〇三年七月二〇日
9：当時、山田統は國學院大学教授であり、著書に『老子』（角川新書　一九五七）がある。高松が彼に講師を依頼した経緯は不明。
10：講師案として高松のメモには映画の飯村隆彦（一九三七生）、演劇の唐十郎（一九四〇生）、佐藤信（一九四三生）、文学の金井美恵子（一九四七生）、富岡多恵子（一九三五生）、倉橋由美子（一九三五―二〇〇五）、建築の原広司（一九三六生）、磯崎新（一九三一生）、舞踊の土方巽（一九二八―八六）、「ハプニング・イベント」（メモのまま）の刀根康尚（一九三五生）などの名前がある。また、塾生からは赤瀬川原平（一九三七生）の名前が挙げられている。
11：一九七一年の「塾」の活動の中でも、高松の『老子』講読は他のカリキュラムと比較すると傾向が異なるように見えるため、目立っている。同じ年、斎藤義重も『老子』に関心を持ち、彼の周囲の肝煎りで斎藤による『老子』に関わる自主ゼミが開かれていたことについて山下菊二（一九一九―八六）が証言している。斎藤の『老子』に対する関心を示す自他の証言はいくつかあり、高松との関係において注目される。
斎藤義重　針生一郎（聞き手）「ディアローグ＝25　斎藤義重」『みづゑ』第八〇六号　一九七二年三月　五二頁
小清水漸　菅木志雄　高橋雅之　二村裕子　本田真吾　守屋行彬　山下菊二　針生一郎（司会）「座談会　ゼロの基軸　斎藤義重を語る」『美術手帖』第三七一号　一九七三年九月　九三頁
高松次郎「フラッシュ＝Flash　斎藤義重氏への手紙　斎藤義重展によせて」『みづゑ』第八〇六号　一九七三年九・一〇月　一一六―一一七頁
若松基「いくつかの断片――斎藤義重の怒り――」『斎藤義重展図録』斎藤義重展実行委員会　二〇〇三年一月二五日　一〇〇頁
12：この箇所二文字判読不能。
13：註8に揚げた高松の著作集を参照のこと。
14：高島直之「〈不在〉への想像力――「世界拡大計画」をめぐって」『高松次郎――思考の宇宙』府中市美術館　北九州市立美術館　二〇〇四年　〇一〇頁
15：正式な「塾」のカリキュラム（合評会）かどうか判然としないが、塾生による野外での展示が世田谷区立烏山中学校近辺で一九七一年の九月二六日（日）と一一月六・七日（土・日）に行われている。
16：峯村敏明（構成）「作品構成・現代美術'72」『美術手帖一九七三美術年鑑』第三六三号　一九七三年一月（増刊）［六四］頁

［追記］本報告を纏めるに当たり、資料を御提供賜りました田島廉仁氏をはじめ、高松靖子、Yumiko Chiba Associates、常見美智枝（財団法人 草月会）各氏の御協力を賜りました。末尾ながら謹んで御礼申し上げます。

（二〇〇九・二・一九　藁科記）

Takamatsu Jirô's "juku" in 1971

Hideya Warashina

Takamatsu Jirô (1936 – 1998) was an artist who played an important role in post-World War II art in Japan. In particular, he experimented with a reconfirmation of the visual arts through his ontological and epistemological approach, as seen in his series of paintings on canvas created in the latter half of the 1960s that solely depict the "shadows" of figures and objects, and his paintings and three-dimensional works that addressed the subject of perspective methods. These experiments greatly influenced his contemporaries.

Takamatsu used his home studio (a tiny space less than 40 meters square, something possibly hard to imagine by those who haven't lived in Japan), and held regularly scheduled private seminars. He called this seminar a private school or *juku*, a term used in Japan from the Edo period to signify a privately run educational institution. Takamatsu was only directly involved in teaching students at this *juku* for one course, from May 1971 through the following March, with the participants working independently after that. According to records, 46 people participated in this private school. There is no detailed record of the ages of these students, but it can be surmised that the majority of them were around 20 years of age.

What did Takamatsu want to happen at this *juku*? His own statement on this subject can be found in the ads he placed in the art journal *Bijutsu Techô* looking for for students. He offered to those interested in attending, "a place for thought and experience about art in general and other various matters." This was also related to the fact that public educational institutions had lapsed into disarray thanks to the protests against the existing power structure by the Japanese university students of the day (just like similar protests by liberal students in America and Europe).

In 1971, the *juku* curriculum that Takamatsu was directly involved in consisted of Takamatsu himself lecturing to the students from the texts of Laozu, the ancient Chinese philosopher; special lectures by invited outside speakers; assignments of topics and the students creating art works in the classroom, and the mutual critiquing in the classroom of works that students had created at home and brought in for discussion. Takamatsu was assisted in this curriculum by Tashima Renji (b. 1948). Further, the art critic Nakahara Yusuke (b. 1931) was one of the outside speakers involved.

This *juku* was not a place established by Takamatsu to disseminate his own artistic or creative theories. However, examination of the texts of his lectures and the memos he wrote on the creative assignments he gave to his students in the classroom reveal the same type of intellectualism as his own works on "shadows" and "perspective methods." These materials provide a much more detailed and intricate notation of his thoughts than the texts he published in public magazines and other forums at the time.

This report presents Takamatsu's own thoughts as derived particularly from the records of his almost one-year period of *juku* activities in 1971, information that was previously not available in detail.

(Translated by Martha J. McClintock)

平成二〇年度　千葉市美術館の活動

一　展覧会

（一）企画展（八件）

二〇〇八年四月五日（土）―五月十八日（日）　七階展示室

「池田満寿夫　知られざる全貌展」

※油彩、水彩、コラージュ、版画、彫刻、陶芸、書など二一二点により、多岐にわたる池田の制作活動の振幅を、新発見や未発表の作品、資料を含めながら展観。つねに時代の先端を突き進んだ稀有な芸術家の知られざる全貌を紹介。

（四二日間／入場者七、九三七人）

チラシ

六月三日（火）―七月二十一日（月）　八階展示室

「インドネシア更紗のすべて―伝統と融合の芸術」

※インドネシア共和国諸機関の協力を得つつ、国内全域を網羅し、古い伝世品から現代の新進作家の作品まで、空前の規模でバティックを紹介。国士舘大学教授戸津正勝氏のコレクションから二三四点を展示。

（四八日間／入場者七、七三一人）

チラシ

「インドネシア更紗のすべて」展会場

六月二十四日（火）―七月六日（日）　九階市民ギャラリー

「千葉市美術協会特別展『秀作展二〇〇八』」（一二日間／入場者一、七四一人）

七月二十九日（火）―九月七日（日）　八階展示室

「ブラティスラヴァ世界絵本原画展―歴代グランプリ作家とその仕事」

※スロヴァキア共和国の首都ブラティスラヴァで二年に一度開かれる絵本原画の国際コンペティション第二一回展から、グランプリをはじめとする受賞者と日本人の作品を展示。後半では初回から第二〇回展までの歴代グランプリ作家とその仕事も紹介。

（三九日間／入場者六、七〇〇人）

九月十三日(土)―十月二十六日(日)　八階展示室・七階第五展示室

「八犬伝の世界」

※服部仁氏の八犬伝浮世絵コレクションを中心に、馬琴の資料、近代日本画、現代の歌舞伎、少女漫画に至るまでの多彩な作品二四三点を通して、現代にも通じる「八犬伝の世界」の魅力を探る。

(四三日間／一〇、五四七人)

チラシ

チラシ

「八犬伝の世界」展会場

「ブラティスラヴァ世界絵本原画展」会場

十一月一日(土)―十二月十四日(日)　七・八階展示室

「国立美術館所蔵による 20世紀の写真」

※世紀の変わり目のフォトセセッションから現代アートの写真まで、国立美術館所蔵の名品により写真芸術の百年を通観。スティーグリッツ、アジェ、マン・レイ、キャパ、カルティエ＝ブレッソンをはじめ、世界と日本の写真家八二名による一八五点を出品。

(四一日間／四、九四一人)

チラシ

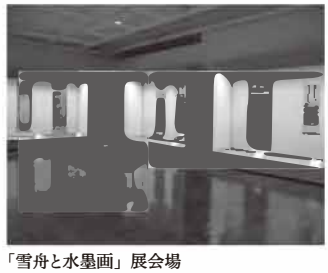
十二月二十日(土)―二〇〇九年一月二十五日(日)　七階展示室

「岡山県立美術館所蔵 雪舟と水墨画」

※岡山県立美術館との交換展として、同館が所蔵する中国宋代の牧谿、玉澗から、室町時代の雪舟、江戸時代の宮本武蔵、浦上玉堂、そして明治の富岡鉄斎に至るまでの名品六六点を出品。

(三〇日間／入場者九、三三五人)

チラシ


「雪舟と水墨画」展会場

三月七日(土)―三月二十七日(金)　七・八階展示室、九階市民ギャラリー、一一階講堂

「第四十回記念千葉市民美術展覧会」

※市民芸術祭の一環として、千葉市美術協会会員および公募入選作品約千点を、七部門に分けて展示。

(二一日間／入場者一七、〇二三人)

(二) 所蔵品を中心としたテーマ展 (六件)

二〇〇八年四月五日(土)―五月十八日(日)　八階展示室

「満寿夫・マスオ・MASUO―『池田満寿夫』理解のための三章」

※「池田満寿夫　知られざる全貌展」開催にあわせ、所蔵作品のなかから池田と関連する作品八九点を選び、三つのコーナに分けて展示。

(四二日間／入場者五、七八〇人)

六月三日(火)―七月二十一日(月)　七階展示室

「手仕事の美」

※「インドネシア更紗のすべて」の開催にあわせ、手仕事の見事さ、美しさを認識させられる作品を展示。贅を尽くして制作された江戸時代の「摺物」や、木版画の伝統技術と美意識を見直した「新版画」など、下絵、版木、順序摺も含め一五八点を出品。

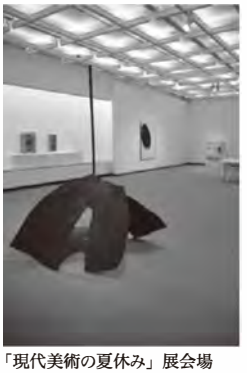
(四八日間／入場者六、八七〇人)

七月二十九日(火)―九月七日(日)　七階展示室

「現代美術の夏休み」

※ひとつの「キーワード」で結ばれた2つの作品を二〇組展示し、それらの共通点と違いを示すことで、現代美術をさまざまな角度からわかりやすく解説。

(三九日間／入場者五、四八五人)



「現代美術の夏休み」展会場

九月十三日(土)―十月二十六日(日)　七階第六―八展示室

「ナンバーズ・数をめぐって」

※同時開催の「八犬伝の世界」展に関連して、「名数」をテーマにした作品など数にまつわる作品一四三点を出品。当館所蔵・寄託の「八犬伝」関連浮世絵もあわせて展示。

(四三日間／入場者一〇、三八七人)

十二月二十日(土)―二〇〇九年一月二十五日(日)　八階展示室

「カラーズ・色彩のよろこび」

※同時開催の「岡山県立美術館所蔵　雪舟と水墨画」の世界とは対照的な、色彩のよろこびに満ちた作品八〇点を集め、「彩る」という行為が見せる諸相を展観する。

(三〇日間／入場者六、九九一人)

「ナンバーズ・数をめぐって」展会場

「カラーズ・色彩のよろこび」展会場

二月三日(火)―三月一日(日)　七・八階展示室

「新収蔵作品展―写楽、夢二、そして房総ゆかりの作家たち」

※東洲斎写楽《三代目大谷鬼次の江戸兵衛》をはじめ、平成一五年度以降新たに千葉市の所蔵品となった絵画、版画、書、彫刻、立体作品二五四点を展示。

(二七日間／入場者二、八一二人)

「新収蔵作品展」チラシ

(三)　その他　(一件)

二〇〇八年七月十八日(金)―八月二十四日(日)　岡山県立美術館

「千葉市美術館所蔵 浮世絵の美展」

※当館の所蔵作品のなかから、肉筆浮世絵、錦絵、版本など二一〇点を紹介。岡山県立美術館との共催展。

(三四日間／入場者四五、四六〇人)

二　講演会等　(八件)

※講師等の所属先はイベント開催時のものを記載。

「池田満寿夫 知られざる全貌展　記念講演会・対談」

二〇〇八年四月二十九日(火)　一一階講堂　(参加者七五人)

第一部「池田満寿夫の誕生と成功」講師：黒川公二(佐倉市立美術館学芸員)

第二部「『版画友の会』と池田満寿夫」

講師：魚津章夫(元プリントアートセンター代表)

講師による対談「池田満寿夫の版画を語る」

「更紗と江戸の風俗」

六月二十八日(土)　一一階講堂　(参加者一三二人)

講師：小笠原小枝(日本女子大学教授)

「インドネシア更紗(バティック)の歴史とその心」

七月十三日(日)　一一階講堂　(参加者九五人)

講師：戸津正勝(国士舘大学教授)

「中辻悦子の仕事と絵本」

八月二十四日(日)　一一階講堂　(参加者五三人)

講師：中辻悦子(美術家)

「監修者による講演会：『八犬伝』と浮世絵と」

九月十五日(月)　一一階講堂　(参加者一一三人)

講師：服部仁(同朋大学教授)

「八犬伝の世界」

九月二十日(土)　一一階講堂　(参加者一〇八人)

講師：町田達彦(館山市立博物館主任学芸員)

「二十世紀の写真―表現と技法」
十一月九日(日)　一一階講堂　(参加者四〇人)
講師：金子隆一(東京都写真美術館専門調査員)

「岡山県立美術館 水墨画コレクション」
二〇〇九年一月十七日(土)　一一階講堂　(参加者一五七人)
講師：守安收(岡山県立美術館参与)

三　市民美術講座・学芸員出前講座等

(一)　コレクション理解のための市民美術講座(一〇回)

第一回　二〇〇八年五月十七日(土)　一一階講堂　(参加者八五人)
「江戸時代絵画の諸相」　講師：小林忠(当館館長)

第二回　六月二十九日(日)　一一階講堂　(参加者二五人)
「近代から見た江戸」　講師：藁科英也(当館学芸係長)

第三回　七月十九日(土)　一一階講堂　(参加者四六人)
「見直される手技―近代の錦絵」　講師：西山純子(当館学芸員)

第四回　八月三十日(土)　一一階講堂　(参加者二三人)
「死絵になったスター」　講師：伊藤紫織(当館学芸員)

第五回　九月二十七日(土)　一一階講堂　(参加者四〇人)
「ナンバーズ―江戸時代絵画と数をめぐって」
講師：松尾知子(当館学芸員)

第六回　十月十三日(月)　一一階講堂　(参加者九八人)
「八犬伝とその時代―幕末の錦絵」　講師：田辺昌子(当館主任学芸員)

第七回　十一月八日(土)　一一階講堂　(参加者三七人)
「江戸の『写真』」　講師：小林忠(当館館長)

第八回　十二月十三日(土)　一一階講堂　(参加者四七人)
「光悦をめぐって」　講師：藁科英也(当館学芸係長)

第九回　二〇〇九年一月十日(土)　一一階講堂　(参加者五〇人)
「地方画家と都、都の画家と地方」　講師：伊藤紫織(当館学芸員)

第十回　二月二十八日(土)　一一階講堂　(参加者七四人)
「現代アートに生きる江戸―浮世絵ポップ」　講師：水沼啓和(当館学芸員)

(二)　学芸員出前講座等(六件)

「インドネシア更紗のすべて―伝統と融合の芸術」
(千葉市ことぶき大学校美術学科校外学習)
二〇〇八年六月十二日(木)　一一階講堂　(参加者二五人)
講師：伊藤紫織(当館学芸員)

「八犬伝の世界」（千葉市市民文化講座）
九月十六日（火）　一一階講堂　（参加者一五三人）
講師：田辺昌子（当館主任学芸員）

「『八犬伝の世界』展ギャラリートーク」
（千葉市ことぶき大学校美術学科校外学習）
九月十七日（火）　七・八階展示室　（参加者三五人）
講師：田辺昌子（当館主任学芸員）

「第五回ナイトセミナー：江戸娘気分で味わう浮世絵の楽しみ」
十一月二十日（木）　千葉市女性センター　（参加者三二人）
講師：田辺昌子（当館主任学芸員）

「冬期集中講座：寄想の画家―若冲・蕭白・芦雪」（千葉市民文化大学）
二〇〇九年一月九日（金）、十六日（金）、二十三日（金）
千葉市文化センター　（参加者一一九人）
講師：伊藤紫織（当館学芸員）

「稲毛図書館美術講座：千葉市ゆかりの画家たち―千葉市美術館新収蔵作品展から」
二月七日（土）　稲毛図書館　（参加者五〇人）
講師：松尾知子（当館学芸員）

四　ワークショップ、その他イベント等（一三件四一回）

※講師等の所属先はイベント開催時のものを記載。

「映画上映会：美しさと哀しみと」
二〇〇八年四月二十日（日）、五月三日（土）
一一階講堂　（計二回／参加者　計六一人）

「ファッション・ショー」
六月八日（日）　一階さや堂ホール　（二回実施／参加者　計七四人）
※インドネシア更紗を用いたファッションとガムランを素材とするデジタル・ミュージックによる玉川大学芸術学部ミュージアム・プロジェクト・ビジュアル・アート・ショー。

「バティック試着会」
六月二十一日（土）、二十九日（日）、七月五日（土）、十二日（土）、二十日（日）
九階講座室　（計五回／参加者　計二二〇人）

「ファッション・ショー」

「ジャワ舞踏」

「袱紗講習会」
六月二十二日(日)、七月六日(日)
九階講座室　(計二回／参加者　計二四人)
※お気に入りの布を使って、日本伝統の包み布・敷き布を作る。

「ジャワ舞踏」
六月二十八日(土)　一一階講堂　(参加者一三二人)
出演：デワンダル

「ファミリープログラム：親子でつくる夏休みの絵本」
八月三日(日)　一一階講堂　(参加者三四人)
講師：濱田清(当館嘱託職員)
※夏休みの想い出をテーマに仕掛け絵本を制作。

「出品作家によるワークショップ：一枚の絵からつくるお話」
八月十日(日)　一一階講堂　(参加者二二人)
講師：たしろちさと(絵本作家)
※講師が設定した最初の一ページをもとに物語を展開して、グループごとに絵本を制作。

「えほんのじかん」
八月の毎火・金曜日　八階展示室　(計九回／参加者　計五一人)
※会場で原画を展示している絵本の中から毎回一冊選び、紹介する。小学生低学年以下が対象。

「中学生のためのギャラリークルーズ'08」
八月三十日(土)、三十一日(日)　七階展示室　(計二回／参加者　計一七人)
※子供だけでの来館をサポート。小グループを組み、リーダーの案内で「現代美術の夏休み」展の会場をまわる。

「伝統の駿河凧作り：八犬伝のヒーローを描く」
十月四日(土)、五日(日)　一階さや堂ホール　(計二回／参加者　計三八人)
講師：後藤光(駿河凧・凧八五代目)
※凧を作り、犬山道節、犬塚信乃など「八犬伝」のヒーローを描く。

「八犬伝展バスツアー」
十月十日(金)　館山市内　(参加者三七人)
※南総里見八犬伝ゆかりの地をめぐる当館友の会会員向け日帰りバスツアー。

「一枚の絵からつくるお話」

「八犬伝展バスツアー」

「お話と人形遣い体験：八犬伝の人形をつかってみよう！」
十月の毎土・日曜日　七階展示室
(土曜日は二回実施／計一二回／参加者　計四八三人)

講師：劇団貝の火
※八犬伝の人形に触れたりビデオを見たりしながら、楽しく「八犬伝」への理解を深める。

「映画上映会：キャパ・イン・ラブ・アンド・ウォー」
十一月二十三日(日)　一一階講堂　（参加者八四人）
※ロバート・キャパの生涯を、写真、ニュース映像、日記、著名人のインタビューなどで構成したドキュメンタリー映画を上映。

五　コンサート（二件）

「佐藤陽子トーク&ミニコンサート」
二〇〇八年四月十九日(土)　一階さや堂ホール　（参加者一三四人）
出演：佐藤陽子

「東京フィル・フレンドシップミニコンサート」（主催：千葉市文化振興財団）
八月二日(土)　一階さや堂ホール　（参加者一四二人）
出演：東京フィルハーモニー交響楽団　弦楽四重奏団

六　学芸員によるギャラリートーク（二二回）

「池田満寿夫　知られざる全貌展」　二回
「満寿夫・マスオ・MASUO」　二回
「インドネシア更紗のすべて」　二回
「手仕事の美」　二回
「ブラティスラヴァ世界絵本原画展」　二回
「現代美術の夏休み」　一回
「八犬伝の世界」　一回
「ナンバーズ・数をめぐって」　二回
「国立美術館所蔵による20世紀の写真」　三回
「岡山県立美術館所蔵 雪舟と水墨画」　二回
「カラーズ・色彩のよろこび」　二回
「新収蔵作品展」　一回

七　学校との連携事業

（一）学校団体の受け入れ

①「小中学生鑑賞教育推進事業」

※遠隔校等の来館に対応するため、美術館が無料送迎バスを用意し鑑賞プログラムを提供。

「インドネシア更紗のすべて」　二校　一一八人
「ブラティスラヴァ世界絵本原画展」　二校　九一人
「現代美術の夏休み」　三校　一一一人
「八犬伝の世界」　五校　三七二人
「国立美術館所蔵による20世紀の写真」　三校　一六二人
「岡山県立美術館所蔵雪舟と水墨画」　四校　二一一人
「新収蔵作品展」　二校　一一一人
合計　二一校　一、一七六人

②　児童・生徒の団体鑑賞

「池田満寿夫　知られざる全貌展」　一校　一六人
「ブラティスラヴァ世界絵本原画展」　四校　四六人
「現代美術の夏休み」　一校　二二人
合計　六校　八四人

③　教職員の団体鑑賞（研修、研究会による利用）

一件　二四人

（二）「職場体験」学習

一七校　五六人

（三）「千葉市図工・美術科担当等教職員鑑賞一日研修」

二〇〇八年八月七日（木）　（参加者五四人）

（四）千葉市教育研究会造形部会　美術館連携グループとの連携

※所蔵作品の画像を用いた鑑賞授業を展開。

八　アウトリーチプログラム

※千葉大学や地域ＮＰＯとの連携事業である「千葉アートネットワーク・プロジェクト（WiCAN）」を実施。そのうち千葉市美術館を会場に行われたイベントのみを記載。詳細は報告書を参照。

二〇〇八年十一月十五日（土）―三十日（日）
「〜ひらがなアート〜チバトリ」

「ガリバー診療所」（木村崇人・美術家）
プレ・ワークショップ：十月十八日（土）
ワークショップ：十一月十五日（土）―三十日（日）
一階エントランス奥　（参加者六〇四人）

「風俗美術館」
十一月十五日(土)―三十日(日)　一階さや堂ホール
(一六日間／入場者一、六〇〇人)

「ガリバー診療所」

「風俗美術館」

「ラ・コトブキ上映会」
十一月二十二日(土)　一一階講堂　(参加者三六人)

「ワークショップ：会田誠とMonument for Nothing IIを作ろう」
十一月二十四日(月)　一一階講堂　(参加者二六人)

「チバトリ・シンポジウム」
十一月三十日(日)　一一階講堂　(参加者五八人)

九　ボランティア活動

※今年度は三〇人が活動を継続。

(一) ギャラリートーク

※会期中毎水曜日に行う定例ギャラリートークに加え、各ボランティアが自主的に行うギャラリートークも不定期に実施。

「池田満寿夫　知られざる全貌展」　定例五回　自主一五回
「満寿夫・マスオ・MASUO」　自主四回
「インドネシア更紗のすべて」　定例六回　自主二九回
「手仕事の美」　自主一六回
「ブラティスラヴァ世界絵本原画展」　定例五回　自主四回
「現代美術の夏休み」　自主四回
「八犬伝の世界」　定例五回　自主一八回
「国立美術館所蔵による20世紀の写真」　定例五回　自主一〇回
「岡山県立美術館所蔵雪舟と水墨画」　定例三回　自主八回
「カラーズ・色彩のよろこび」　自主二回
「新収蔵作品展」　定例三回　自主二回
合計　定例三二回　自主一一二回

(二) 鑑賞リーダー

※「小中学生鑑賞教育推進事業」(七―(一)①)等への協力活動。学校側の希望に応じて、少人数グループでの鑑賞を行う。対応したボランティアののべ人数を記録。

「池田満寿夫　知られざる全貌展」　一校　一人

「インドネシア更紗のすべて」　二校　一二人
「ブラティスラヴァ世界絵本原画展」　二校　一一人
「現代美術の夏休み」　四校　一二人
「八犬伝の世界」　五校　二八人
「国立美術館所蔵による20世紀の写真」　三校　一九人
「岡山県立美術館所蔵 雪舟と水墨画」　四校　二四人
「新収蔵作品展」　二校　一一人
合計　二三校　一一八人

（三）ワークショップ等の運営補助

「親子でつくる夏休みの絵本」　八人

（四）ボランティアの会企画によるワークショップ等（六件八回）

「インドネシアの香りを楽しむ」
二〇〇八年七月十二日（土）　一階エントランス奥　（参加者一九人）

「自分のしるし―蔵書票づくり（子どもチャレンジ教室）」
（主催：千葉市生涯学習センター）
七月十三日（日）　千葉市生涯学習センター　（参加者一二二人）

「八犬士キーホルダーをつくろう」
十月十二日（日）　一一階講堂　（二回実施／参加者　計四七人）

「自分のしるし–蔵書票づくり」

「八犬士キーホルダーをつくろう」

「木版画年賀状を作ろう」
十一月九日（日）、十六日（日）　一〇階講座室　（二回連続／参加者十人）

「多色摺木版画体験：クリスマスカードをつくる（まなびフェスタ）」
（主催：千葉市生涯学習センター）
十二月十四日（日）　千葉市生涯学習センター　（参加者二四〇人）

「写楽、夢二を摺ろう！―多色摺木版画ワークショップ」
二〇〇九年一月二十四日（土）、二十五日（日）
一階エントランス奥　（計二回／参加者　計二八〇人）

（五）　その他

※参加したボランティアののべ人数を記載

「バティック試着会」着付け手伝い　（計一二人）

「えほんのじかん」のサポート　（計一〇人）

「中学生のためのギャラリークルーズ」のサポート　（計一〇人）

「伝統の駿河凧作り」のサポート　（計二人）

十　出版活動

（一）展覧会図録（六冊）

『池田満寿夫　知られざる全貌展』

編集：いわき市立美術館／千葉市美術館／東京オペラシティアートギャラリー／池田満寿夫美術館／広島市現代美術館／毎日新聞社　発行：毎日新聞社

『インドネシア更紗のすべて―伝統と融合の芸術』

編集：朝日新聞社／町田市立博物館　発行：朝日新聞社

『ブラティスラヴァ世界絵本原画展―歴代グランプリ作家とその仕事』

編集：千葉市美術館／足利市立美術館／うらわ美術館

発行：美術館連絡協議会

『八犬伝の世界』
編集：千葉市美術館
発行：愛媛県美術館／千葉市美術館／美術館連絡協議会

『国立美術館所蔵による 20世紀の写真』
編集・発行：千葉市美術館

『岡山県立美術館所蔵 雪舟と水墨画』
編集・発行：千葉市美術館

（二）展覧会の作品目録・鑑賞補助のための小冊子
※企画展・所蔵作品展ごとに、作品目録または解説付き小冊子を発行。

（三）定期刊行物

① 美術館ニュース『C'n』 第四六―四九号（四回発行）
② 千葉市美術館研究紀要『採蓮』第一二号
③ 千葉アートネットワーク・プロジェクト二〇〇八ドキュメント

十一　ホームページの公開

訪問者総数　二九〇、二三四
閲覧ページ総数　一、一五二、八六一
（二〇〇九年三月三十一日まで）

十二　作品の収集

（一）　寄贈　　二五件　五五八点

三岸節子《高原の花》、梶原緋沙子《梅薫る》、無款《漁夫雪景山水図》、伝銭舜挙《鶏図》、伝董其昌《山水図》
（以上、楠原豊松氏寄贈）

石井光楓《米国・ポートランド初夏》他　全四八八点　（石井万里子氏寄贈）

高田柳哉《中次 夢幻》、《忍草文大盆》、《面取華文研出蒔絵飾器》、
《鶴首文八陵喰籠》、《桜花文盛器》、《中次 萩隧道》、《胎陶金梨地 四弁花文壷》、
《平棗 大徳寺椿》、《茶箱 春宵花あかり》、《金梨地花葉文 好日手文庫》
（以上、高田柳哉氏寄贈）

清水九兵衛《AFFINITY》（清水久仁子氏寄贈）

柳敬助《辰野清平（節梅）翁像》（辰野正浩氏寄贈）

無縁寺心澄《金口路にて》他　全二九点　（齋藤琴代氏寄贈）

無款《静法楽の舞 二日寺沢屋》他　全二二点　（浅野秀剛氏寄贈）

山本不二夫《断層》（山本巌氏寄贈）

鈴木方鶴《四字「萬法皆空」》（村井みね子氏寄贈）

（二）　寄託

喜多川歌麿《嶋台持ち娘立姿図》他　計二三件

十三　所蔵作品の修復・保存等

（一）　修復（九件）

土屋幸夫《76―A》他　三点　汚れの除去他
山谷鍈一《祖母之像図》　亀裂の接着・剥落部の補填・旧修復除去等
伝李唐《早春行旅図》　画面の修復・再表装
伝劉松《青緑山水図》　欠損部の補填・再表装
伝雲松《四季山水図》　画面の修復
伝狩野芳崖《龍図》　画面の修復
加納光於《桃色の星座に沿って 吉増剛造のために》　破損部分接着
清水九兵衛《AFFINITY》　汚れの除去他
元永定正《作品》　画面の洗浄

（二）　所蔵作品のマット装

土屋幸夫《房総にて》他　計二六点

（三）写真撮影

田岡春径《秋晴》他　計二七カット

十四　所蔵作品の貸出、特別利用等

（一）作品の貸出（一九件七八点）

※平成二〇年度開催展について記載

①「遠藤健郎『白描戯画』再版記念展」
（スペース・ガレリア、二〇〇八年四月）
遠藤健郎《靴磨き》他　十点

②「竹久夢二と『月映』の若者たち」（須坂版画美術館、四―五月）
竹久夢二《あきつ》他　十八点

③「源氏物語千年紀展」（京都文化博物館、四―六月）
冷泉為恭《紫式部図》　一点

④「ＫＡＺＡＲＩ　日本美の情熱」（サントリー美術館、五―七月）
落合芳幾《婦女風俗図》　一点

⑤「無限への立ち位置―河口龍夫の一九七〇年代」
（宇都宮美術館、六―七月）
河口龍夫《関係―熱》　一点

⑥「フランスが夢見た日本―陶器に写した北斎、広重」
（東京国立近代美術館他、七―十一月）
葛飾北斎『唐詩選画本 七言律』他　四点

⑦「大三国志」（北海道立旭川美術館、七―八月）
堤等琳《三国志図》　一点

⑧「シリーズ 美術の遊びとこころ③―夏―」（三井記念美術館、七―九月）
磯田湖龍斎《月下舟遊図》他　十一点（寄託作品一点を含む）

⑨「秘蔵の名品アートコレクション展」（ホテルオークラ東京、八月）
伊藤若冲《旭日松鶴図》　一点（財団法人摘水軒記念文化振興財団寄託）

⑩「北斎一門肉筆画傑作選」（板橋区立美術館、九―十月）
蹄斎北馬《三囲神社を望む立美人図》他　十一点（寄託作品七点を含む）

⑪「なつかしの千葉の風景を描いた油絵展」（三越千葉店、十月）
小林猶治郎《岩窟》他　五点

⑫「源氏物語の一〇〇〇年―あこがれの王朝ロマン」
（横浜美術館、八―十一月）
冷泉為恭《紫式部図》他　二点（寄託作品一点を含む）

⑬「江戸南画の潮流Ⅱ―文晁・華山の新感覚」
（飯田市美術博物館、十―十一月）
諸葛監《虎図》他　三点（寄託作品二点を含む）

⑭「佐伯留守夫と川上澄生―木版画が結んだ絆」
（鹿沼市立川上澄生美術館、十一月―二〇〇九年一月）
『新版画』第一号　他　二点

⑮「文字の力・書のチカラ―古典と現代の対話」（出光美術館、一―二月）
種谷扇舟《臨雁塔聖教序》　一点

⑯「元永定正展―いろ いきてる！」
（損保ジャパン東郷青児美術館、一―二月）
《作品》　一点

⑰ Tetsumi Kudo: Garden of Metamorphosis

（ウォーカー・アート・センター、十―一月）
工藤哲巳《あなたの肖像》　一点
⑱「源氏物語と宮廷文化へのあこがれ」
（徳島市立徳島城博物館、二―三月）
葛飾北斎《井出の玉川図》他　三点
⑲「芥川紗織展」（横須賀美術館他、二―六月）
河原温《考える男》　一点

（二）写真の貸出、撮影等（所蔵作品の特別利用）
比田井南谷《作品一（電のヴァリエーション）》他
計　七七件　一七〇点

十五　友の会

会員　六三七人（二〇〇九年三月三十一日現在）

十六　博物館実習

二〇〇八年八月十八日―二十六日
計一二大学一四人

十七　図書室の運営

公開日数　三四七日
利用人数　二、二八四人

十八　施設の利用（利用日数）

市民ギャラリー　二六八日（三六団体、二三、七八七人）
講堂　一二一日（一般六〇日、市関係四二日、美術館一九日）
講座室　二六九日（一般二三一日、市関係三〇日、美術館八日）
さや堂ホール　一〇五日（一般四四日、市関係三九日、美術館二二日）

十九　市民ギャラリー・いなげ

（一）特別企画展

二〇〇九年一月十四日（水）―二十五日（日）
「千葉大学普遍教育科目『展示をつくるb』実習展示　IMAGE×INAGE」
※千葉大学の授業「展示をつくるb」のなかで、学生参加により企画された展覧会。会場となった稲毛の風景をテーマに、若手・中堅の現代作家による新作を展示。浅野耕平、ASUNA、斎藤美奈子、m/s（佐藤実）、鈴木泰郎、中居伊織、無縁寺心澄（物故）、吉田重信が参加。
（二一日間／入場者四一〇人）

「IMAGE × IMAGE」

「『日本風景版画』全作品」

二月十日(火)―二十二日(日)

「千葉市美術館所蔵作品展『日本風景版画』全作品」

※中島重太郎が主宰する日本風景版画会より、一九一七年から一九二〇年まで計十集刊行された『日本風景版画』を全点公開。石井柏亭、森田恒友、平福百穂、坂本繁二郎、小杉未醒、石井鶴三による、各集五枚の版画と木版タイトルの付されたタトウも含め展示。

(一二日間／入場者四七一人)

(二) 施設の利用者

展示室　一四、八六五人

制作室　五、六九一人

(三) 施設の公開(公開日数と見学者数)

『旧神谷伝兵衛稲毛別荘」　二五八日　五、六七三人

「ゆかりの家・いなげ」　二九五日　五、七〇一人

平成20年度利用者数

		4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月	合計
展覧会観覧者	池田満寿夫　知られざる全貌展	2,804	5,133											7,937
	インドネシア更紗のすべて			3,684	4,047									7,731
	ブラティスラヴァ世界絵本原画展				320	4,883	1,497							6,700
	八犬伝の世界						3,294	7,253						10,547
	国立美術館所蔵による20世紀の写真								2,886	2,055				4,941
	岡山県立美術館所蔵　雪舟と水墨画									1,256	8,079			9,335
	第40回記念千葉市民美術展												17,023	17,023
	満寿夫・マスオ・MASUO	2,168	3,612											5,780
	手仕事の美			3,341	3,529									6,870
	現代美術の夏休み				247	3,993	1,245							5,485
	ナンバーズ・数をめぐって						3,324	7,063						10,387
	カラーズ・色彩のよろこび									963	6,028			6,991
	新収蔵作品展											2,679	133	2,812
展覧会観覧者　計		4,972	8,745	7,025	8,143	8,876	9,360	14,316	2,886	4,274	14,107	2,679	17,156	102,539
貸出施設利用者	市民ギャラリー	576	876	2,190	2,804	757	1,224	1,993	2,237		661	7,082	3,387	23,787
	講座室	315	285	427	503	302	307	386	313	264	303	62	269	3,736
	講堂	182	319	492	336	305	824	618	359	251	370	3,376	664	8,096
	さや堂ホール	251	11	135		612	390	88	1,800	863	230	8,611		12,991
貸出施設利用者　計		1,324	1,491	3,244	3,643	1,976	2,745	3,085	4,709	1,378	1,564	19,131	4,320	48,610
その他利用者	図書室	144	196	185	238	307	217	194	159	158	211	127	148	2,284
	講座・講演会等	75	85	182	141	76	449	98	135	47	207	74		1,569
	コンサート・ワークショップ等	166	29	280	189	266		605	760		280			2,575
	学校プログラム・実習等	17	17	72	94	234	313	260	120	126	221	111		1,585
その他利用者　計		402	327	719	662	883	979	1,157	1,174	331	919	312	148	8,013
美術館　利用者総計		6,698	10,563	10,988	12,448	11,735	13,084	18,558	8,769	5,983	16,590	22,122	21,624	159,162
市民ギャラリーいなげ	IMAGE × INAGE										410			410
	『日本風景版画』全作品											471		471
	展示室利用者	1,213	1,374	951	1,317	1,120	1,745	1,878	1,342	940	622	1,152	1,211	14,865
	制作室利用者	460	555	573	431	380	646	685	285	247	552	634	243	5,691
	旧神谷伝兵衛稲毛別荘	566	635	419	477	406	490	900	796	358	626			5,673
	ゆかりの家・いなげ	555	584	397	407	336	262	791	706	277	528	451	407	5,701
市民ギャラリーいなげ　利用者総計		2,794	3,148	2,340	2,632	2,242	3,143	4,254	3,129	1,822	2,738	2,708	1,861	32,811

千葉市美術館研究紀要
採蓮　第十二号
二〇〇九年三月三十一日発行
編集・発行―財団法人千葉市教育振興財団
千葉市美術館
二六〇―八七三三　千葉市中央区中央三―十―八
電話　〇四三―二二一―二三一一（代）
制作――――印象社

Bulletin of Chiba City Museum of Art
Siren No.12
March 31, 2009

Edited and Published by
Chiba City Museum of Art
3-10-8 Chuo, Chuo-ku, Chiba 260-8733 JAPAN
Phone. 043-221-2311

Produced by
Insho-sha

ISSN 1343-148X